



犬傳九輯下帙之中愚評
下

門曾
號
卷

600
73



別と退をき照文ハ詩要めてるうみことくらひは
あらぬせんとば一日上退むやかくもあくもや
あらえとこころのあや有てあやう一例の事とを
あらそぞくに脅流してしまふと籍文感むるすまよ
○八士町居の休憩所妙真代に而門の宿所と遠う
て三日一二の麻をちかく自らとえうちめとおとおと便宣
君意四家先とくの令と有あくくお入に著翁も
公とくあくとす有あくく精ぬ照文、家道のほとよ
て名薄ととて招金の致ひとひあくと恰ぬ便宣
ぬるも一照文いま、高館よ在す、大土門知てあ

ちんとまろ其家へれあそ今もここてそのみー是文
ひとの定れをひハ只の口の廉れあるも○さる
ほよぬ真ハようもの舞足の跡とまよ十三行
ゆゑ更上あひてさるハ誰う胥きくもとせんせん
コハ首ヨリサヘと自らのめそ其誰も尺へまよのほ
とそく一の情意えで感ふら日毎よあてアシテた
のーくあさにえき柿^{カキ}晝月屋なヒ誰も胥くといそて
いえヨンおとひくひよひよ門と云ヒ文の花^{カス}くほみて
ゆうつーとあきよまー鳥つ^ツーとく奇^キあいかく
皆の教ひとゆ^{ヒトシ}古今くおよより孫ハ送^{ハサウ}は受たま

のなといよ^ク誰う胥^ヒくま、大士們入まうてぬ真う胥^ヒし
あう裕母娘孫們うさうむうう代^{ハシ}市ううをにう
入あるふとそ^トとくへりとそろぬ文めうすうう
ひとうくハあけあ^ハと奇^キ施^スる手絶感^ハ心感^ハ服^ハ誰う
葉^ハまきまきまくもくへまうもくもぬこあうう
無教^ハぬうス^トくもふてよもまく^ハ浪千行前條^ハと
教^ハうやくうまきまくへくもく^ハうて此^ハ萬^ハ此
袖^ハう^ハセ^トス^トくも^ト例^ハ快人通^ハア^ハ獎^ハまうまや^ト
まうくううううよもくも^トまううううううあ^トうと
ハ目をすぬ^ク華^ハおと^トう^トと通^ハア^ハミ前^ハ代^ハ即

よ論や一章を再三讀む事す。かくえをまの文に
ちりやうもあれど、お代四郎、白主ともいは里見よ臣
よと承せんて其義とあまくそらうとあんうお奥
よを更に恩をうそひこよと軍役よ道すすゆ様よ隸く
へと理義を明きて、すゝも智慧の毛野うそれてあ
る伴當们を代ひてぬくそらしてあくつかをかと毛
野うそくホ奥をよし家産くんぐもと
あくつか徳小あくねとくみへなうじ供給石酒飯の場
そとそへ又おこらふくそめでぬくふふ盆ある
文こわくまつてぬく寺絶セニシテヨぬくよぬ文く

そつよつよつよらむかくそくのみくつくハラとよハ若
えぬやくこすみのこみも有るするやおヌ大士们そと
モ酒をのる、あくねと宣アフリへいまくつて穂か
逗るやくハ有りやあくねや先日よとる今夜の酒を
主客裏エあつてあくねと醉アフリハ士氣勇よ甲乙
それとその文うよよぶよハ酒量アヒヤウハ上下ぢきよ。誰
上頃アヒヤウ誰酒量アヒヤウ人推そきつれハ其ぐくさん
うもかといつそくらふと實ハ頬アヒヤウ人よくすゑの
すゑの外そ大角アヒヤウハ豪飲アヒヤウ小文書アヒヤウハ本良慶アヒヤウモ
やあれじよ酒量アヒヤウ人そくく大士よて

上頓さんと酒席乱醉によるハシと手、眞の豪
酒大飲と大蛇丸地黄坊們も必三合と遅くあつて
その酒瓶のいざなーくとハ大酒行しゆくつまほし
云ハキテうるとせよきさう生てしるハ大吉ハ多く
ハ行具足つことあるハ行とあゝするハモリソムニ系
ひるゝ石部全吉さんハ國房のすゝ大角と陰の外信
乃ハトカ其余ヨハ婦女とおひひるもをきらき酒とす
時よ陰ミ飲さうともすへうひとあひてぬむすはあへう
にまつハ解ふるをとばきとさうこれゑ酒色のすと
是またよ大吉のコハ有りととぞとぞひじうととぞ

あゝうらめゆ上頓沙量のえをあくまつまがハさんよ
大士ヨハ酒のまぬとハ有すくともうん重語の量
ホーイさんハ知矩ハうそへくあると上頓もあくも
あへまし圍情と又圍鷗と伴セ士ハ嘉あざれハいま
そことよへりうさみと情愛をやぶるアソヘ信の
をもてうそへきシロ六士ユハモリあくもとこそハよ
かく今うそよ沙量ハ小飯ヨ土瓶の至上頓トおまきをひ
えふうとてわくと飲とつうくそめみさこそむつ
まくまくあくとみまくもとあほやくまのまく
あくまくういふとてまくほの益キヤキモユメモ

はて笑へ ○ 新造の官所の様子をひもこそ
えもうのよせりと紙葉の精緻にて三層構造とな
るやうもあれとほのびそといひにち晴天便
宜にて吉祥旦達日ともて稻村へてほとの
文のつるきも姫あらふくも練手自作のぬれ○見
参のやゑあは妻一翁ハ大刀一諸士列席ハ大
多きあるかくみまろ大刀と甲冑からひ精緻
と目さされかねまろ恩初のお食鑑もあらんけよまづふとも

うん例のこゆうまことろ○親房を又改りて設儀主
さんと六七士と同居七士家老の下兵頭の上城主格月俸
軍役諸事そんてやうもとすうえうもんやこうよ
してハ衣冠上席あるあらめ理り八行字かくし七士
三コハ行まつ字順う一體う身のハ大士席に上下ふ
へすかうハ後まきと字順でこなとう併あまうつ
めく又おひづくよほとそくそ頗るきつてもあまく
ほ年序のみをあんうそハ後轉と俟ひて知
さんやうきよおれとそくまろし代四郎ユハ
よう月俸おいうとあはるさふはあやせよニ孫、賜俸於

金帛の恩賞を厚うり後見軍役臨時差遣を仰ぐ
とくセシムシテ日をもとのこあす主君を西行
征伐は有功のこそ、難兵まで子推の遺そく賞勲を
まほきあ輯のことを結さんハアシナリ乃とモニスル
みな駆けうき感あす大士の厚子義ノホコトヨモハモ
有クシマシ松金堀内其子侄と進退の事シムコト是
後の説ふとあすりせばよるあらぬレシトモタム
余よキ筆のつゝこと後所とハ有ハリコモクシテ傳
シテシテあづまスレ○大士翁稻村見參の次官代
郎を仰みて大山寺よりまつ伏井の祠堂より詣て更よ不

勤を拜一そひも富山の墳墓より詣てまよ、大ハア
く昭るのみよ途カラシ行當を還一まよく行脚の井
おして昨宵こよてう出巣まで七日レ食の勤行と
あまんとて讀經一居るそのあらゆもう一徳北迎
のあきの言もあついよと大よてかくくめく途アリ
そくあるとて又行脚でもアラシテソノ伴一既よ香華
院の住職よりことをあらへの他行ハアシムモ七日
本寺より在りやむせれハ昨日登城の便宜として有司よつ
てまよと申そへまよ右へき欽次回び七日登山ハ兩
候のまゝ知らしむる大かくぬみうといえハ倒の

小理屈こぢののう申さハ又ほんとあるつまつての要儀
もあくまでよるん名聞めいもんあつたふもあんゆゑ全すが
併あわせて一人行脚こうか打拾だしそつみうさん、大の
、大なる事ことをこころむけ要ようのあらざひ、大士だいし們もん西天さいてんは見
參さんみて其次日つづのひ登山とうさんえりあらへるに
近ちか金寺こんじ五家ごけの廟びょう所しょ又伏峯ふぶの神主じぬしもほりとおして
ね其次日つづのひ登三山とうさんと又ひとの順じゆりそし祭まつりてあるもそ
もく其理ごりありまことに其謙けんばつまき聖日せいじ女金寺めぐら
其次日つづのひ登三山とうさんと大々おおおそく參さんひてありとあるも
後あとはあつてユ今いまよりとはよもと大士だいしのあれもみて

ユ今いまより大士だいしとく次日つづのひ登三山とうさん、大難だなん秀ひでと
富岸とみと讀經よみあらこのスス、うぬしし、あうといい、ほ
えんほんかえんかえん小理屈こぢのうつけてあらうとこぬむよあくじあ陰
セヌせぬよ尼みきこみみ天てんとあらそひるんるんと假あらわ
一いちあうあうをうつてふまそまそ、其工く、其ぬ深ふかゆゆあらそ
ききりんりん○回向まわむけよあがあがと偲おもひ或もハ古歌こかてむよななほの
ぬええよとキキ道みち十條じゅうじょう足あしの墓碑ぼひめるもふも
もう一二世せい力ぢニ尺しゃくハハ前まへ降お恩俸おんぽの兄あ弟いの墓ぼ石せき
ここもも前まへすう墓碑ぼひと賞たまそそ自じ由ゆゆゆららててまま
深ふか伏峯ふぶの墓碑ぼひええのそそハハの大山寺だいさんじの木主もくしと

そのまへふと意はうてむらさんかくみて犬馬様と
さなえ碑づくよも有まへれはきよハキアゲ
發えふと勒^{アガ}せんハヨシコトロニキテアサムル記
モハセシ而六松とおひひ七犬士^{シナギ}のようゆるすみ
みとみの懐旧のめ文ほのづくやう犬士ちのてみ登
山あつ前候境^{カタマリ}をねるそろよて十^トうの懐古文
あくまとあく子又古歌^{カタマリ}力尺大馬様の迎^{アガ}とハ中
をゑれゑれハセラん其^ヒともハめうけんと仕事^{ハシメ}
うてハ今^{アガ}てたゞやうけん^{ハシメ}とモスセに古の
文あゆミヨかること極めてを復^{アガ}き文の間解^{アガ}と

有ヘヨシシトト皆跪^{スル}て閉眼拜^{スル}半黙禱^{スル}丹誠^{スル}
ス千萬無量^{スル}て余言あんもう^{スル}意^{スル}
身^{スル}もの^リ○此次の日近令寺^{スル}拜參^{スル}禮服^{スル}
首主^{スル}もの^リ又訓^{スル}壽明神行者の出^{スル}那古^ハ小^ハ五^ハ口^{スル}と
音^{スル}と^{スル}参詣^{スル}と^{スル}て那古^ハ小^ハ五^ハ口^{スル}と
チヨト^{スル}と^{スル}と^{スル}筆のいづぬ^ハモ^リ照文代^{スル}即^{スル}
招請^{スル}と^{スル}と^{スル}と^{スル}益^{スル}と^{スル}と^{スル}益^{スル}と^{スル}て
義^{スル}ハモ^リと^{スル}と^{スル}と^{スル}成^{スル}と^{スル}と^{スル}と^{スル}て夏
立^{スル}秋^{スル}七月立^{スル}ま東西あゆ^{スル}ハ犬士^{スル}よ良主
よ臣^{スル}兄^{スル}合宿安^{スル}居^{スル}の時^{スル}と^{スル}と^{スル}と^{スル}と^{スル}文^{スル}

さるさよいとあくスラムるよて臯月みを月とま
オーレタニキトモトヨテサリシテハトフク麿のあくふ
いとみやうへ○就居う市河よみふ時々人酒音を
贈り賀一或ハ詩歌をかせふとてうつさきまよ
有リハことまよ郷壇の田舎れとアセクムモトヨ
似而非え人とも唇ヨアシハ彼母とカツテ女れとアフ
ヘキセキとキテし編く説すハ犬士ウトヨミ、入房
ハ犬士ウハカモレルとモハシキと四家先其人モア
みの祝め賀使も有ヘヨシミテモはの左ナ右ヌ暇そ
アテと有リま、只文選の上ふともあれハミルの句

ち等のアハおつこよそりてと有りれと向くハ今かし
門前エヨシ、シのむれーねよ有ニキヤシヨリカモスルハ
おのゝ俗喜欵クハトクヘ○両侯同席、大照文と
侍うてハ犬士を召して之を談先つハ即ク義丸ヤドテ
大輔と東條の城主女婚ミと語るもモモアシモの談
話の末に改姓の因目、みハ夫子と語るテアモアカヒ
ろんむと夫子が語る御院ニ承今キアリヤシヨ慶喜
ヤシテ改姓後モ老侯の厚き御心セヒトメ感せら
モテアシく趣深く姓氏家號庵宇のキコムの元
ふとある人のひよたぬとくも裨益の明辨

さて大士と金疏をうて孝吉を徳の後なしむ
る二度は意外ぬと考へての深遠と有りうる也 お
金疏孝吉ハ里見角国創業の大功をのまくは仕て
臣下ハ地を剣き城をつけて杉倉城門の上に位
していよいよ客との重臣たるきし普通とゆて
孝吉そのゆくとて里見は功臣たるも何のあゆう者
へすれど深くかよは義とひて平らにとて
有りん正木の故主ともあくみて里見は仕事とひて
異心よりおぬえとかふるえとよ唇とて有りまじる
孝吉う里見を助けて山下と討つて漢祖よ鳴らして

韓の仇を報ひて張良と曰くて仕へて死とぞ潔きハ
於良と上と召してろ其子孝徳う里見は臣とぞ
孝吉う意と仕へてやうとあくと送私と云義実をね
育して臣としハ自然の理ハ城主女婿ハ義実を孝
吉と號ふところ文面を明ふとモーその孝徳とま
えもよくとく本編を思ひそくの役立つて有りと
於里見は臣とてよのうの後榮あるよひて仕と
あくと道心かのめを正大とせられるとく深遠に
あくと孝徳う又里見は大功ある千城の八馬士と莫
足りぬといふ其家国を西覇ちしもと其功割

葉を助け一父孝吉よりハ大士もしく父母あれとも
さあてちうそすとあらめくの理モニ善父ナニシ義祖
父ナニスルもかことこの正大ハまろ根本の母貫目あら
ヒ正大の金疏父子は後モくてハ有ヘリに後アリテハ
其正大モ一ニシテを妙條の妙標目後モくてハ
後有リ其後ハ誰アリモトキ代の主モ主モトメハ
大士と金疏氏とハ夫モ涅槃モ涅槃モ起葉せ平
の心がよりあらがめ結びて生モリん腹稿遙遠のほと
とみりハ感服敬服つゝもあまう母ミ終又ニシテ
一老侯の外孫當君の侄母と宿世の伏姫ハ神感靈

驗一部中ヨカニミチム大光明之上の母ミ有ヘキ
クモコニヒ父母モハ三義更ニ立思申女婚の因モニコト
アリシクアドモ一母とモハ靈神ナリコ父とモ
又ナモモ有ヘキアリハ僧モアリテ正大の、大法師
佛弟子即佛と云ヘ一神靈ハ幽^{ウツ}ニ^{シテ}施護^ジ一佛子ハ頭^シ
全粟ヤモ神佛と云母とモニの里見ハ大士傳エテ
ミシテの根組の深姦ハ奇妙^{シテ}可絶かくこそ有ル感服
セテ人や教服セテ人や人の後^{シテ}其姓氏と移モ
タリテえれ^{シテ}モテフナシムアリモ其例とぞ
人ふと惶く悼あれハラシミトリカニアリモテ有ヘキ

清寧白髮の正すみこと武烈小長谷のもうみこと
ほ子まつまさにて孫名代侍子代白髮部小長谷
部を定めたまつたうりても灼夢も止むて
のするやんやさて神餘も金碗も姓氏よハあくことを
そぞろいあく家号庵まこまハ大士と其の後
たゞ一めんよハそのくの姓氏ハ姓氏とて家号と全
碗よそえきされとハ士の家号ハだいの大字それ勧う
てハ本傳黒闇そこで夫俊云く理言金碗とハま
總姓とハをさき自由姓自立姓氏によるか勅許と
請ふ請ゆみよ京のほう京のほうヨモおまよ

ナシナシ愈出愈奇なりの後數回ナリとて
ぬし感心としんじりやうそままでし其國其家之
名高き家名を其縁あるを又さあぬと改めし
るやうのうして既に正木大膳と実紀よハそのう有し
さまよせうう金碗いそほひがを家よりてその家士
改姓すうしむは併くあんば一家号姓氏のたういそ
あれと亂をそうのうみをつぶさしり諸家割据自
尊潛上ふて其セのあくとあれハ里見といふと家士
改姓意よまをとまよせううとそれどつゆすと有
へまと古くとて今と今と重んじてお軍家よまよ

致ひて勅許と詩すちるは皇義宣の三義をもつて居
るうて折著翁翁の筆なるをう正大をよく
あらわへまし信臣は例ハあらひととも云々室町へ
詣宣示さハレ精細も例筆をもひて詩よと潛上とぶり
又まくそるとあつて例をみそと詠よと潜上とぶり
改々ハこれこそ潜上みそとあれ例をみそとえと意
をつくて詩よとみそ是又義宣によるとまつてゐる
べきなり○大士们ハ阿とそう意やえとづかくも思ふ
へきるうてセ士よハモロく近覺とそやくあらる
深きやうとも而る一回邊即領承をりてあち

もひと情をそーさて例の役ゆて道二郎をみえ
果ひつゝもの愉快うしてあらし理義を明シ士威
激甚處とおーたまも一回領承ひいよもせよま
有てめゆう一○文房突然と抜き出て使と詩
さてくそ外のちう姿けりまふ義宣と使とりあつて
誰あくまそかみうみうとせひく次の行とよみあくぬ
間一文房実然た童よとハズくもいそうひよ
きんやうめくさてゑうて其のみをやあくるユス
ととくくせひもととひよとせはせはや童よあくでぞ
そあくでそのことくヌキめとあくでぞのがハあ

つうあひて次回は明白にてあつたが、諸大臣
年の私心あれハ争ふて争ふて自ら文上めりま
ほひ黒體同心ハ大士の唐山の軍書によく有る先
鋒の擇ひなどあハ争ふてはくとあるが、左軍を
さしあげて欲されど、大士もいわく、左軍を
せし使誰よ余あつても争ふてあつまく、人をえねた
士の中あハ余せども、はよろて面目ええありみと
るハはとをあせざひ、とへうる、是年の秋月の
ようそのユス・主延よ、又七士ハ、ともう我共
請へて、そ議して、誰とと、奉^{きよ}すよあんう立廢ハ

そぞく義実詞もててぬ間に找みて、一人先請へる
是も立里年のユス、但一朝廷將軍家とうとも
車き使ひ、額髪あ、童顔使ハ、一夫ハいとの事
あくとその額髪正口へ素をくつて、えよんと
妙自立筆か、アーモラ化作のひせるとこ、う段
タ小かく、それハ是又理あり、狀として使ひ、すま、いう
モと、車ひも入紙も、あひ、き使ひ、すま、いう
して、すと請ふまで、おげきよ、久ハ、ひと老の者
おこしり外孫と称ま、もはと、おと、大年ふとも
あまく、もと、おと、正使ひて副使よハ年配

ほとよき照文あかりはまくらえもよ細てあしら
狹額髪入用せうがいりやうハあまくらえひくら
使つかひ人ひときハ既すで右うコソそラヤアラシモスもスもムム
まく役え○こよ評ひあくに又論もんあくに六ろくよを益ますの一
すあう召めしも華はなつひえ見たまふまつよく貴眼きめんの費ひ
さはゆひつとも承うけりすまうそそてハあふぬ例たとの癡ちとい
くせん上じょう洛らく使し既すで寂ぢやく處しよ定じやくすうて物ものはせき室むろあ
らうそそハかふをくるのめめ許ゆ多たさんハそそを動うごくく
りすああそそだ以いてかくくもぎぎななくせりせりまうそそす
ああそそ只ただ上じょう洛らく使しまつきて一ひと迷憾めいがんのほほをかここそそて

又またととそそハ別べつるるああそそ大だい角かくううこそととみみすす
おお輯あの評ひ中なかももひらひらるるむむりりととかく復かくつつああ
そそ是ぜとと一ひとももたたそそええそそ出で端はの猫ねこ魔まを斬き
て父お讐しゆと雪ゆきもも余よの大だい士しトトハハああめ一大だい奇き詰づ出で
端はままかかららくくそそ是ぜみみうう一ひとの花はなここざざるるよよ千せん両りょう
死死ハハああててももととててハハ助けたすけけせせれれとと帮助キきのああああ
ちちりちすすかかの諸しよ軍ぐん皆みなおお並ながりりそそ一ひとへへそそちちをを
すすああそそ議ぎ論るんの理り言ことももああれれとと是ぜ又また聚あつ議ぎよよつつ
てて論もんをを度と言いしてして論定もんじやくセせんんへへそそそそてて文ふみ
武ぶききととそそてて梨り園えん通つう言い一ひとべべそそ舞まいをを持もる

臺ハキミヤノシウのあほすいひるめくほよキ文臣
めきて温厚ひうめあさし和漢の學よそくま礼字
玉自らの下すあくへん人口えども富く郷士よく
せんの上路使ハおとめこゝで京都よりて文武兼
備大角の大角ゝる禮字靈玉のおまこと候とかと
一人舞臺一元ともやつてやつてくもももとを教習す
奇ぬ格別かくは今まくもととつてくもあひに本
傳もみる結局近一せんの使はれしめひくも
女男の一人三つの傷も有よくくとくあつまひくも
スラミシシテアヘンうめ役をきとめことくえ

ススメキリよハ曾てきうちれう從うてのゆあし
くしてつひよ一人衆をのそくてやまんと竊よ憚み
かよゆゑみかくまきよ革とつひやまくうりう

百三十二回

前回の後、大坂もうよづある面をよみがることく黙
りてゐる。此の晩お一晩時、奉主ハ・大法師
うちひハ必其向いあくくわざるよさにあひて
ゆゑと剣へよく、大うそと有まゝき傍官のるなど
あハ子とつてハいのゆうふとまう普通ぢぬ革
のむらとくへまし先がくは彼所の向う、大そく

て其をそりとくさてハ俗官の言のあひ下モト俗友の言
をくてハ寺職と辯士のあらモト寺職と辯士の言
をくてハ教西念成門のるのあひ下モトさんう又點毛と
向ふモハ大其點毛ゝるの意を參へりよぢとタリと
恩令の折りやまの言たまは其恩令のほきい却て出家の
の本をふらぬと辯士と其辯士もわづく婉曲す
て顔うく只黙れと向ふて也れと考ふると其文のあや
つゝあらんやあれとえむよ一お又のゆきる傍く黙れ
もうハこの辯士とあらがくめ看官は眼うきせうきの文
うて口圓まよ一おとみよ例の筆法もとよと其

矣と彼は何んあら見ひあらとて延してと居まく人アヒ
アヒあらよ目アヒほとら候ぬよゆうと教してせられも
まくらじあハ義実アヒあや一みて仰アヒとめさるよハあくさ
るあく一えちう義実アヒとコ大士改姓義実アヒ、大
さきを教へくわらへ黒譲アヒくわらのハ大士アヒモニ
と談そみとも、大士アヒ談士の言せしも一これ又譲アヒ
とひさなめてあらそいふもあらひ定アヒまことこじ
かりハウス黒アヒ教一みてすらアヒかまつてくいそく黒
譲アヒうての黒アヒとほや一も時そのをもをすひアヒ
必かくも有へきけり、大士アヒも條とよ辯アヒとまよ義

義実ハ呆るゝまゝてさてハ主意に違ひますと咲くゝ
とおほほの聲と向むき立つゝいそほひとあひへきこま
肇衣傍友せよゆる、大う縛もとくらうのことを以てえのえ
義実うゝ大を知りするよ似しれども義实山豈其道心
をあくさらんやはれども大は厚くとて人の功其身の方を
賞すまゝハえもぢれとて、大の、大たゞ道德とも信仰
もももも香華院の寺主うて一國の傳め上ぢしれ
と於肇衣傍正すやあけくすりハソシく其徳と
耀やうさんとの信意と信仰の高僧と尊貴ニモス
古今ニモテ皆一般義実一人とソヘモナリヤ

又おとづらキムと我よりしてさゝセよとの談あつまよ
きつてちかへもせきやと其意の古事と談まつ
てのゝ眼ととて人をあくべんう財用の多ハ餘るゝ面
きるゝまゝくとくふ・むむとくとは是ソシケル老
侯の厚くつゝけるおおえ著翁の細々とけふ筆
のところをもへざるゝみづて其厚其細と處づく
へまぢう○大う兩條と縛もとくの言と、大うてハカツ
とかくこそからをハ、大はあゝと称そへーく
○義実う呆るゝまゝて咲やくゝとてハ主意たゞひよ
きと我りうきハとて咲やくナヒと、大と咲やくヌハ

あゝるところ老侯敬服老筆感服危と義成と
クシハニ義成とく其とといふぬとゆうもあつて
さひ有ふるのユ今と誰う呑いんこもくめとこ
さてが論言が長實モハ義成ハ懷手たどひ外よほそか
言と加えよきことあつとも人の詞りあとうまでハ義成の
貫目あゝまゝー又うむちやくわくもと大を論す
言て明理貫目ハまたももうもう、洋西新あひのる一言小
して子倫あまうる行又上洛使のゆゑのす感をへく
服そくいふも深え里見あゝう郎他作あゝおゆ云
義成ううよそも有へきと義成よりもせらうをあらそ

ひの深くめにさうとてハ面白きところあゝか義成の貫
目とあそもら義成の貫目をもろんじ○大五教の罪
とぞひてこそ言承前後の段ぬめなうぬちゆうど
ま吉の名迹あゝへ異議をく言承をへまうと異
議をく承てとめあゝとスナムヨリトドメ、大士とま吉の
名迹をへまうとめあゝに於大士们宿因の父母をくま
重徳の道あるとつと即決ヤーセ金徳の者まの後
あゝまう本さんと大士をそんとまうへ因あゝ、大の子
うて子供を副へひる半條とて異姓の義定を向
けの足音とあゝ下りも又ハ大士より一圓自うと有合

右本條のめく、大う子をもまうねとせらんすゆを
大あとうをとえーとあじて更人をよて子とて其父
はたじしもと領衆ーとて親教もとみふるぬ
有きまを狂歌段の深めくもとて之を教ふよか
本條と談やーと大佛との辯義神儒の論え
一轉して直よな者とほとゆくあつ下ハ本條の因たら
そもくと、大のこもとちだは済めこのあくとひわも
考へて、大う辯意仏所の本ハアとそく於モ言
もととく刑餘の身とみるよ万死をもととゆき
もと今功と恩とゆきとゆきとぞもととて今文

云ふとやうのほどとことくかくるハ英士と奉ふとて
父をもんば、大うてまよこそとよ看へきハ玉連串の功
改よどく、只此上ハ一ともよ伏せりくみの和りりとて
以あの罪とあうふい其餘諸先靈のつもる正えの念
の外をきハまよそも次候よあかのむの洞崖讀誦ま
つもくと今つもよより傍へれハ傍近一通とて講じ
よと其たハ有りと刑餘きの其念と今功成く恩
昇のびとほも狂たくとて確る辯え、大なるが
大なるが本條もハ大士二姓とすて里見創業
功臣のを施しのはたるす事よぬと幸免まで本傳

おまゆの大國目折そのと設モまたひよし禪モも
諭モ修モ也義深モもてそぞくを改姓一氏ハ之
モくも感ハ成被せり○金疏氏もも一人足
るきよニミシナリハ看官もあらむも有へま共ハ
モムトヨリヨ召モする用モハ例のめぐみをもつて
の人モハいふも深モスラモカクシれど凡智ある
も其モトナリモアヌキモアヌハシレモソテ今
ヨロミヨシ假モ一人トヒテツテアシノハ就居モテ方ヘモ
久ハ名古モ因キモアヒト本姓トウツの是非自餘

の大士ヨアリトハモトモカクシレアシノハ主モ師ニモ其姓
ト嗣テ甚だんハ曾祖又ハ父祖又ハ外の歴々
て右ヘヨシニシニモトヨシ假のものニモトヨシ上源ほの記
キルナリハはとモく自哉のみ矣シモカクシタ○
金疏モ嗣モトナリ惟考考のなるモふに神餘の名
迹モアリモトナリニモニ氏同字もと解くのこと明
弁リトスル動きハアリモニトナリモカクシアリ
モヨリヨリモキ宿因ハしてニモの初談クカク軒
セシナリトスリトシテよリナリモカクシアリモ
アリリナリヨリ義宣モ輔けて創業ヤハ神餘の

仇と報や。さて本事ハモヤシトモ又神餘と再興
至きるにあらず。がん黒アリ臣とはて同宗の至りと
つるさいさまよろじ神餘革命の時と自盡して義を
全セヤ。義實其意とゆう。ヨエテ死絶シモ
能キ。廢帝とくと白毛。賢弟の仁喜。麻呂安西们と
王ナカニヨリモトモ神餘とくよし。ヨリモ幸也
シテ弘毛あれど。枯弱多病。是非ナシ。コトヤツテ
大猶は伊因。アリハ犬士。モテ多病と御す。シテ
タナ。惟孝。吉久後の。アリハ神餘の。祭と御す。トクナ
吉久素懷。ヨリ達して。義實。ヨリ深もとみ。書也。

著翁の意恩。实。ヨリ深。微。ノ。狂。ミ。ハ。犬。士。全。碗。を
嗣。の。ミ。ナ。ア。モ。神。餘。と。併。セ。副。ト。テ。ハ。二。郡。旧。主。の。名。迹。
モ。ソ。シ。ド。ス。ア。モ。貫。日。ア。リ。ク。ミ。ノ。ハ。犬。士。ア。リ。く
不生。の。え。母。ハ。父。母。宿。因。の。父。母。旧。家。の。一。姓。つ。そ。ト。ア。ミ。モ
キ。ナ。セ。ア。レ。ト。ク。ア。ハ。何。ク。感。服。ナ。シ。○。お。西。の。ま。キ
タ。キ。ナ。ホ。レ。ト。、大。の。法。嗣。ヨ。ヤ。ヨ。ヒ。ト。ハ。又。ア。リ。ハ。ル
キ。ナ。ミ。ク。ン。キ。ナ。ミ。ク。シ。ム。キ。ナ。ハ。ト。イ。ア。フ。ヤ。ハ。其。キ
憾。シ。ハ。ん。チ。ア。ト。お。ミ。ナ。シ。ト。キ。中。ナ。父。子。ア。後。キ。ハ
い。ふ。モ。い。ん。ナ。ア。リ。ト。ア。降。ニ。義。成。ト。論。言。中。ア。ミ。ハ
よ。く。年。ア。リ。ヤ。テ。モ。憾。シ。メ。ト。精。め。例。ハ。ミ。

さきよりあらうおお新面ハおみをもひるを
客訪にて主訪へ令成さくめうまくもお小僧
とハナヤシと仕ゆて有むる事よつとも御あかこよ
て敏捷ちふくを目ばづりとかくへとハ誰う思え
ほー令成のえみほよんかこ一幕の用のみよハ可
いやうおもむねくは司あるありやとおを
おもむねくあらうとくこくしてみを用とひようと
ばやうとお寺こめこしわがまに領内の上総のあらも
大成村めうそく信乃道をや照文も又うあま
おぬきてそうとハめこめとおもひとせ金持とく

香華院とほよく造立あらせきて、大和成川宗帰
の住むるもあくまくぬあくまくの又はひめよあて
念成りうのほとこうさんとそくチヤシとはゆて有むる
深て重こせよあすすむとすゆく苦あらんまへ
小すさんと其ふくまハ餘のたまると並て感服せま
んや○筆のつてこゑやくそん化姓と嗣と冒と
とよハ薄えのつりよとば有へまさんとこの傳よハねと
やん匂かくようてばまくくとくとくやうるよと
と有るやうに大吉行と言よハともかくも義を失ひ大口言
葉よハ冒とあくまで有とモヤう○當序ハ内談

ヨリ五十七歳て稻村城、兩人を召て兩家老より更金を
付託するのを仰うへえもこの際の事又記慶ノ年
歎ノ年歎ノ年後ノ序とととととととととととととととと
ゆくハヨモアキシコムのるとすととととととととととと
とあるよスヘレ水路をりそん理のあらわすとおど
ほほのお込ミ緑林舟帆の伏線をいふとモ一〇右記
嘉永ノ年歎の事上略ノつきヤアモウテの稽ムハツアモ
モく折ムハヤクハモウハモウトホモドシテタキアソルウモ
神靈ニ玉音セキテ其事九十九ハ諸事カクシム
論セキルト実モナツテリハ九十九ハ九年トテハキム

さて終神の字う附きてまたとくまでハ大士中より人
別種神童ヨリアリテニシテ只其神音ヨリナリ九歳
の童子ニ信して十八歳の壯士トナリ文武諸般ト皆イヒ
コトマテウ神童不思議の事出洞以後ハ諸大ト仰
智勇の壯士年歎ハカニ一倍の十八歳トナリテ諸事と
又トキアソ人故ヨリ今セディスヒトナリハ義成ト昇
てアマリテヒトナリモ自也トハ向キナリトナリ
四天王五虎れ軍年歎ハカニヒトナリセシ和漢夷記正
傳其事アマリ又伯益甘羅トナリ奇童の例ト多矣
ハ大士ハキムヒトハ向キナリトナリマロと四歳の幼童を

四五年間は諸大兄があつてセハ玉具足年齢もほとま
ハ兄弟よきむらすすきめハ感心しき行をさるシテ
久も今そく又そくよすれどく召あつまひたし
まことすめの卦事すうり ○ 義成たちと退けて
みくみをすと祝あハシムハモニモモニモニモ
退とす。兩人とも果てとがを祝ふはとあすと
ふとてハ照文ハ其座エハアレタマヤシヨアスアリト
ミモヌモ正使こううつまてアレタマヤシヨアスアリト
ミモヌモ祝ふはとアリトテアリトテ 照文ハ側はまくま
モヌウ文もさうとどうくろヤクモヌモ祝ふ

ひゆとて日をくわなまくさく文とくすと退か
セム祝三人そ密にうとうとすよハアリマシテさて
セ密方ハ何とあらう後はそのとむけりまくま
やーん仕女密者點の文面モハハシモ密者モ有され
とそすとねよくひ人の有る所てハアリシアヌハ大士滿^田エ
て老侯は見多そみて退く時照文ハシムハ専用於ある
て跡のうそくうえいのあらあじき裏を以て用
後もすとむかうとあるわざやこの内情用閑法モは
別よそくひとあはきするもアツテとみくハ皆そのう
のうのもやうてチヒハいとゆえお前向の者へ

以テモトハ又ニ用談五ツモトウケルハ其もレヒト
召シテモト文面のタキ其時其モアの趣ニナシテおミ
エラモアリテ紫上諸大事の使のソノモトは暇との日自ス
セホハ幼わ奉れエクテハ必密トロハ因之の御所ニ
セモモニテ方へタモソニテソムアヘタモソボルズ
文面ハタキス奈使の御事イフモ詮アリて而ルトカレ
○代官郎う然の伴アヨ。れんうるむとかよかくと云カ
チテ道モアキテ諸大夫の論モタマムモテタクシヒモ
ニ往クタキシモ更ハ富山以来教主ヨハシモキニモ
ユハあれトサエの上諸軍陣のモトユハ非モ彼内意

のタキ代官郎うすヘヘアモモシル平和モ貢秋諸姓
使朝廷室所ヘ使モトハセモモニ。おもろう安亮モア
モトコモアモアモトクモセ伴當モモモモモモモ
一立のき滅ハトモカクモ道モアモト大士の意見モモモモ
ヒモトモ従ヒツモナムハアキツセモモモヤトモア
セモト其モヒモモモモモモモモモモモモモモモ
ヒモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
黒ノリ不道モアモモモモモモモモモモモモモモ
副モモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
走テモ便利の人とこそ副ヘセム仕徒モモモモモモ
古稀モモモモモモモモモモモモモモモモモモ

老人を其用の副ヒテアキニ方へてあはれに立ふる
大士仰う思ひ奉參セリ至るまんよ請申さりゆ
そくまくまく有候ゆゑ往ひて後條の赦尼其全
を有うて是モ又、そのかくまくおひそ
諸申ハシマムの甲斐文もあつて功ヒテさんあくま
いさんうせむと、ハ只赦尼有功アシマシタマク
モテやんやと、モトモトモトモトモトモトモト
叟うおじひそよ姫ひ副ひゆき用あすまき老人水
煉老勇の大用あつて不測の危難と助けて功を成さる
後條の眼目浮て微めのこころく心身の諸大士の言を

司ひきひそよえうわくかのねうひうひう
えのううううううううううううううう
しめにあはまも其ゆうひうううううう
ひてれきを帮助せ行のううううううう
ひゆううううううううううううううう
助けまうる君家への忠心をかこむ
云ふと此のれ居をゆうの鳥あ
翁ふ富山は木叶のれ居よつて傳の意公云うと
あさらすをあおみの神勇たまや傳ひはつとむなよ
とは実九事の童よこして仙因あち傳老翁いと

わやうきあらひあるはまくと傳翁よりハ拂ら
きぬまのえあむひえも有へきて其金かよくほ
あんよせなの延りをいじとそとうてと延ひりしるす
るゆくかさハ伏ぬ神靈暗ひもうびびりてさうえひの文
外画意おうぎす有ありて之際そのとき文面もんめんを御外ごがいの神處じんしょ
稱めいふて余本來もとのとあるはとくと其鷗とアスをらむくる
ゑと眼まなことくとく○歎たん真まことの御龜ごめい上落じょうらく
せをなめめくよハ田たまむ自じの故ゆゑのゑとくと小え
ウチうちと御ごまちうんまちうんと叔お母めの情じやうとえくるやうに清陸
強人是これ又後あと同ひとの伏線前まへせんの兩家老りょうけらうの譖ほと立たて

くして言かひをもつ文もんあふふ錦帆きんぱ絶人ぜつじんハかかハ
かかこ寢ねハハくく必ひかくかくのの丁寧ていねいそくてハハくくままう
ととこと小こええ者もの諱いみ逐おと天あま道みち盈あふて虧くわくくの言ごんと
詫わざううははいいとくく是これと自じ我がははの伏まへ線せんとれ
くくよよハハくくちちももひひ伏まへ線せんと後あと條じょうの
公ひ合あそそひひそそとと都とのの人じん情じやうと訓くにややれれとと重じゅうみみる
鍼しの破はととへへきき武ぶ内ない宿しゆくの童わらわ齡れいと重じゅうみみる
臣おももハハくくぬぬ人じんももををれれと童わらわ齡れい功こう臣しんああじじハハくくまま
人じんととおおががううててああはは一一例れいの裨ひ益えきとと珍きんきき

○田代翁の二士免許と船と港口と送りしるや
用をもるむせひと文面とあもと此二人は教誨よもて
ぬまの恩あつた一送とて其詫ひとつづくふく一すと
へまが届キリあよ小文君と馬頭上よハ送るも
うとひ言モゆアアヒテ又タニ人モハ送とくよ岱
郎うあうさとひやーみちよのやーよハ度よ文上よ者
めーさと用をもやのみせんとこれれどもひりくえん
キルユニ人モ送とハ用とあくろおじよも偽をものみ
うとタニ人モんすあよハ煉字ぬあよも私の旅ぶよ只
怪うて送と去をも里元家風の嚴肅ハシをとアスケく於し

又餘めある氣そハ傍ヤヒトヒトヤエ社ニ人ハニミシヨ
ひて送とて報恩の一結ハシきそぞも又化ハ怪ハシも
めと教族ハ送とてハ馬頭上モモるく岱元の來
らさるう目よつみて脚色ハシよももみ有りおうて記説
と怪うて送とぞもあくる深一こづべ○十數里
と走うて夜泊よ代に郎とあやーむをユダヤとセし
ちやーとキツカケヨモ代郎と筋荷ハシ名告ハシ
柏子とよもくうー首官ハあよ々とあうてあれハ乞
教誨ゆえいきそく呆りて氣とまよふくとう果てふ
代に郎ハほきみをとまくえハクサといふもアスケ

三人のりやアラシメー衣三番ク侍侍と自称して是即
あよむすアミコロアモク賞まへたひすアキツキ便せ
クホ○代四郎アモルアムトモトモアラニヨ通アマ
キ箱長許弓の向をもて果リテサクニサニ高量ヒ
エモウルモソ東峯小水門ヨ先モ惜化モ老候モアレ
シモキモアスモアスモアスモアスモアスモアス
吟吟けて走一トモヤん敷一トモ深一トモアモアモア
たゞいそんモカ一トモ東峯モトモセナシ内ミモセ
テ妻娘们のおこまアソブキヨマケアマコトモ得

タキ賢老候アユ又ハキキ賢老筆アムホトヨ
道高小文書ヨミテ休メテ官門ノアマツテ妙真大ニ告
てアモセヤモコトハトメシカモアモアモアモア
アモアモアモト誰カハ音ノキニツキハく感服
イズムアモアモアモ○叶メ仔の穿^{アシナガ}アモ衣三番ク侍
役博コムラ只得望^{アシナガ}候モアモ外モアモ有モ
一トモ是ハをモねんモ泊ヤハ下田の港ノ澳中モ
モモキハぬけのやレシモトモ下田港ノヨモヤン^{アシナガ}
ハ家屋モまみモアモ便モアモシテ又泊船アモ

お席上にておまよめまのわあくを港ワカニとぞろ
とてふうるの自由ハカマキテ便リカナシテ
ヨセハ御用ニウツモトモアベクモトおそれ
著翁^{アシキ}トメケナヘモアベクモトおそれ
利今昇^{アキハラ}平の彦上と大江テの永代口浪舟の安治川に
船^{ボウ}セヒトトヤリ大ニ黒セリ^{アシキ}お又港^{ハシマ}の便
宜^{イシ}アリトモトハミ使^{シテ}其意^{シテ}威^{スル}
トニ至^ル只得^ルトヨマタシマハタケアシキモサリ
ヘキシ是モテ右の窓ハキミテ^{ハタケ}今^ハ船^{ボウ}公^{カウ}許^ムシテ
果^レテの^ハ矣^シトマシラク^ハ船^{ボウ}公^{カウ}ハ^ハ船^{ボウ}師^{ハシマ}嵩^{ハシマ}工^{ハシマ}

乗^ルて出行^スよ誰^モの^ハチ^ト告^シム^ハト^シシテ^ハ人^モア
また^シト^シ船^{ボウ}の家^{コハ}妻^モも^シく^シモ^シテ^ハ被^ル
ユハ^シ出^シ船^{ボウ}工^{ハシマ}也^カハ^シモ^シく^シモ^シハ^シモ^シ出^シ
ア^シハ^シ積^ムシ^トモ^シ出^シア^シハ^シ出^シア^シハ^シ出^シ
ア^シハ^シ出^シア^シハ^シ出^シア^シハ^シ出^シア^シハ^シ出^シ
一^ハ日^モ達^シま^シ便^リハモ^リ道^{ハシマ}リ^シナ^ハ九^ト
九^ト重^タた^シモ^シと^シて^シナ^ハト^シシテ^ハ先^シ候^ス白^{ハシマ}じ
ト^シや先^シ者^ハト^シシテ^ハ船^{ボウ}公^{カウ}許^ムシ^ト向^{カシ}マ^シ
シ^トハ^シ有^シシ^ト監^シ用^シシ^トシ^ト此^ハ空^シシ^トシ^ト海^シ

御ふと紙一ひすあるとやくとえ革のふくさ
みとて例のぬ安らぐとさんとてゐるゝう〇苛子崎の
港ひあそ般昌のせふつう今へえと荒涼とありてあ
は城のすハヤモロヘのわす家とあぬあとふとみまよ
会つとそし大すの使船のこころへかくしままよ
あすれと風急危うじとかくして漕入と運霧とを非
そく日をかうする化作あハスムキとて精めあまくして
行ふれあと七月下旬つして運霧となむと時候の
おみとく自およてこゆやうし右見あるとむくとる港
ちんはそろひあ般昌不般昌アーモド用をきやうされ

とせ條半事あるの條せんハ只一筆又一ひとの荒港とて
文面ふきちかし先其港のいあの系園とくとく呑まで
さて今ハえと荒港とてみろのう今ひすやしよくとくろ
ん文面の花もひう折ほ経所然ほひて才代がすの蟹
昌ヨウラのれども们う武の一つの名ひ又と港ハ今
現よあらじうの港せんハ多くあはの般昌を呑まで合
さるくとくすみア〇酒飯と求むと路邊うけと
とく呑まで次に任當篤士們う浮舟は儀みて酒飯と
行まで實さんとまこと呑きこそハ制めみて咲き玉すひよ
あきて四九二郎う事はあつ後停よとく忽めと被一葉

の下領酒屋船を三年の間にめでて水滸と云ふ
おほとちのと黄泥岡よかとうのみ巧までへそり
やし。○おまうかみと誠ひう今も實在あらえと
を誠ひうど一役よ言ふるうて例ふう一とくとも
さける華次日亭午う天霧うつうも又自ら
よめこゆ事ああごそのそあひくとも有くと今
霄う雲うあんと云ういそかカイハツの三九そーの意
外れやう

百三十三回

お圓えみ井拾の一個の武士ノ小誰あく詫うくよ

名告うまで其人も其本きゆゆも知るゝまづ口画をす
隣尾の容貌の賢主らーキよ合せてハ其家士とハ
姓名不都合且名のうるどじあ條のいうめーけあと
有るる事なと、こうぞ役也アソモウ鳥獣者ふそく文面
の一奥よ打渾だらわのまともあくとむかへどもまくと
ちの義努よ似シマツヤモ胸板あくと發きうよ
さみハコミ打渾役化ハコミタケル一箇の標目まくこくびよ
きハ多おもとはそかくるハあくとまくとあハサキ渾
方そあるよあくとやあくとめふととハサクとそ
さまくとほ城のそんかんとハ意外の深計ハシメあ

うてハ計焉とくも、そぞ謀りん奇めすく
さてもすよほとこをあん半はくやそらよあつて黄
泥國のあようとハ先さんと外の寺めしたか一よせく
きやうへえようあされと換骨奪胎^{かわくだつぱ}の増補加
減ふよすくわとよれ^わおきよばいん巧とそくざるハ多き
ちよまくわが者翁めぬ巧とそくざるハ是れ
のよふ方へき翁めぬとお経めに感ひ^か徳揚志後こそ
あれ其時子^テハ正^{アリ}梁中書^{りょう}使^し生辰^{せうじん}綱^{つな}子^ス不正^{ふせい}
中書^{ちゆうしょ}大師^{だいし}（媚^みのからわ罪^{ちやうざい}益^{せき}）^イ行^ぎ傳^{つた}不^ハ義
士^シ好漢^{こうかん}さんハ誰^{シテ}よひきめづくれと盜^{とう}

お邊^{へん}をく謀^{めう}とこうも賊^賊智^ちとそくまん翁^{おう}ハめんとくう
ノ^ノと盜^{とう}行^ぎ賊^賊智^ちとく^ク賊^賊と使^{つか}ハ^ハ正^{アリ}正^{アリ}
ソ^テ従傳^{つた}と本傳^{ほん}よそ^テる^テ其^のる^テみすう^テと^テ邪^よ
正^{アリ}を^テか^テ不^ハと^テる^テハ敵^{てき}でそくかの^テ半^{はん}まつひく
素^す翁^{おう}廢^{はい}寺^じと旧^{きゅう}賊^賊と^テ廻^{まわ}近^ぢふとく^テと^テ従傳^{つた}よ論^{るん}
不^ハの意^いハ^ハ鄭^{しやう}に従傳^{つた}の論^{るん}ハ^ハ論^{るん}と^テ機^き今^いて脚色^{きやくしき}と^テ
立^た立^たと^テハ^ハとして其^のの^テよか^テを^テれらう^テくもあ^キ
る^テと^テそ^テて眉^{まゆ}の筆^ひの正^{アリ}を^テ自^らと^テ其^の場^ばよ^リ
其^の人數^{じんすう}又^ハ積^たわよ合^あセ^テハ^ハケ^ルサ^マコ^ハあ^リぬ^テと^テ

ゆきとおのれとおのれえもんをもくもくとおもて著るよおきて
このの割も量り定めの上にて、戸とよもよもよこ
○おもと四九二郎とたーふひの理言とればよどき
言に愉快巨鎗と振抜くと縦横の面影あうていと
いとる一四九二郎と上陸未先と請ふるいふよさくま
ことくらこくふうそよ詫ねさるへき財智のはをあむ
へー上陸人數と引さんばくとて諒とふせれもおもと
勇力ハ豈外のよき四九二郎六丈よおもよおきくとお
かよくくと偽言とかまくとみを本謙と諒とす。小賊と
へと賊膽斗大さきの筋うの巧ちよよくとく

○隊兵ひだりをひきまもた里とまとと抗け或ハ辯ひこ
いふもせんと上陸をいそくと隊兵と請ふへごとく請
ひをとめ欲す。一そまもとおのづく賊をめりやう
す。おもんと。○おもと四九二郎と請ふへはれども
えのぞえゆきうきて寛よおもとくわゆきうよおも
ひやふうよ賊をあうて殆老きよとひくよまよ
なえあうといそんハいきよひくよと一の被まよとえ
右こわういはく全やのくは伏線ともよまぢ
代に市う一譲子乃とおもとおもとれて照文よるよひ
ゆきとふとそばくせよと船よるあんとハ神

あまくして誰うあまくへまじめてあまく奥耶の方こそ
人心うきうきああさん文行はあはうてあまく夜馬う
えと代日やも向をそそゆえよ夜ひゆく即ちまほめ
帮助と成るまでかの通すア軍陣の隊よ隸くとおまう
伴よきてえとも皆是鎧のわんたのとこハ向一キ五万
リ何うもかねうと代の兵船よのうてハ怪けのス、よにし
れハくみゆニヌヨシモアヒリ、是勝色の配がこち
可とて其ためよ理をまると召さんや右よつよめくせ
一議をくわどりて、ひだり其理の右よあさるお代官郎
さあひゆくさあへ思丈山中の難戦いゝ右へキ、かず

助け又ほとよく走ひて夜馬をゆく彼がの大功を受ける
此條の眼目たいーのよし○宰領夫役者等のまかき
後へよ跟て、渠們うあよ上陸と制せられて、嘆きり餘る
於てよてよろしくて、と放き居り制せらるふまのくひあひ
くるうまこうぶあ、寡モニシテ、と叱一ツもして、とのあて
又吃く聲あらうんからくねくおなづきうほとく後條
へとかうとてユ会うて、ころの者共ひにうとて次條の
たとけよあまをちる、其寡モニシテ、との賦難よ
ううえのユマリスナリ、一お事もほし大よ黒すとば
経緯素頬う東林の方への少隊よ頑徒們指揮もまた

一て多く東林へ走り後ひるとそのまゝおひ今すれて
渠木門へ向ひ意行をとく○下頬酒をの上立席妙名
こと妙音うくのめまゆく喚あくこゝ賣あわの其品
も又めし○就集う叱く禁めて諭すの利害をうるん
ある者面黙ぢにゆきとまきてくるやうし渠木も
らひて亦復きとえひひく嘆息をふことうつみのま
味きが嘆息かをもとがて寂しうきやよみて遂に
那言ふは併せうあつゝ水滸もやゝに一あむけうくも
あけあはとれどもひ二人一役あるやうておもろく行陣
無のせん四そじう其鎗をとてこのゆすきがれよから

シテゐるもあくさんとぬ文うたのまゝあくハ眼あく
やうとあくまゐていとゆうくいと向くあく董派國をあ
さる人ハ行くものあるかく一靈玉の奇験ひよま
とをまゐるふうく人のおはすめにこよむて楊志
と王壞りもえむひとと倫じ快こ○僧羅立郎ク用弓を
推すゝる賊のてあてかくもかくし就集空解せざるハ弓
めく射すあく一靈玉あくハふきをも停まくはあ
さと空解をもとてその危きもあくもすとよまが
すてそれ即就集う自用を智あくとまうこまくハ又僧羅
立郎就集う歎くして小嘆嘆門を撻仆一ノ剛きとふと

うかめらと射さるをやとおもふ人々へきうそば其時とハ
おもむこると下をあよこそ飲まとハ射倒してかま
すましれ既すまと下してハ就きよう金銀うめぞひて
さるやをすだまは小嘆囃们まをかきてどう金銀を
翁えおし扁舟に乗てまんとまくおもと計んとあく、
衆賊とかぶ組いよびう或ハ短兵をて突もかく一そ
よひてハづふそ弓箭を引く、ああへうまえに
かまく深くえうう賊の本謀山一おのたのあくや
満船のるこそ有(きせん)て僧羅立郎もまと下して就き
を討とうてとうしてゆくと船を奪ふへきるすけよ

そき一車とおもてせ一人小舟みてなんとまくハ小嘆囃们
そとかくも就きまつとからうて満船ハ詰まう大喜ひあんよの意
うわのうて皆みなでねじくえれハさうてハモー小嘆囃们
ク就きよもーうとくとくもふうて居くうとスルハ優長
ちふと就きよはハモーはくまき中くうふうて石を
えまハモー就きよたまくあくみハモー刻うウシモア一人
今又はて車を一車とおもてかくまく小舟もあをす逃れ
やうく舟をも一車とおもてかくまく小舟もあをす逃れ
やうに其勝きくせう意う文面もあハヨ有(きせん)て
のみくふとハ不せんもあをすよくえふハ文つまよ其

主を自殺とスケマアリ追ひて挑みあつほよの本事も何
小嘩囉門は力と金にて事と成さんと云々まぢうと意外の
勇者も心臓へ事成ること無敵と下すまうやで生
ふのみ一氣と徳とく逃げそくそくいあも盜賊根性ある
べからく小理屈をこねば及ぶぬるシテ○舟經は
寺拾むる兩個の賊を鼻春蠶にてくく句調いふもかえん
るやつうせ駆逐又えよくんさて一番又投うちめようして
又後工責問えまくまくしてあらあめゆハウチギト於
もみ合せハナナラニラニ○おもろう俗羅立郎を追ひて
刀を抜てちつハ例ふるに中精細感心之痛卧など

ちうて曲者と追うてちくへ其刀一れいともハ有キタクと
云々既は空解と起きてモテ小嘩囉門を投ちし不くして
あれどよくヤキハスのまゝモテ刀ハソツの間一帯一やうあ
さうかうふとちうとてハ斧子ほともやけをも精革せきふ
○故あふと俗羅立郎并は查勘大うるす又院ニ元の毒
のてみれと云ふて知らふるも言あくじくつどあ
称といふと脣ニテとくとくとあ
一孤^{かぢ}よと俗羅立郎の外の本すあり邪敵のこあくを水中
よ墜入つて危きと云つてゐるよと外の深泓みゆく
先ももとこののをたすへたと李達張順の尋陽の

すほひしすりうとうそくはあひつゝ黄泥岡よひみをあへ
そそぞかくとお居う武能文事の達大士の自得を
よしも又奇一き伏狀狀のるむれいわゆうようてえ
水煉もいて有るよーうともあすくまよせぬと
よそくみよ、熟れまて修羅立郎よ苦しめらうとさか
の危難者官よひくやしてモミミロヘ代りゆとそ
まと面々きおぬふう御がの戸田川の大角あへと水中
自在の如更むうううくち杵柄りと編てくとひ者官
公念もぞくよるよと老勇のこゝ見るの水神一ト
ほまみてみこねんが危きと助けんとのせゆゑあへて誰う

をあんよくそひそうと徑ひ本一うふ深歎とぞれよす
又人まんおるハつてくらうふと神宮河の信乃墓六
そくのゆまくはとあんむすひからうやうあくし
此れゑ危難後悔と自負とほれの言あくめ
ゑハ出羽は本房や端とあよ長風よ疑とてあく
さきもの一抑あふと狂その勇意とがくあくむく
さよれ一抑ある著翁の深筆狂えれさくよ童子
せんハ驕慢のあやまうとあんうと伏狀と一抑の述意も
あんう傳づんとあくハ富山コハ社山川もあすふとざる
ちく水御ハ遺してふるーるー○旅入らむ

潮を呑まん飄のめく浮かのきよ奇め
化作あはれうさ又靈玉大おと仮とうかとうけハく
しくも唇へきりさるとかく何ともそくちくもくもくも唇あき
て後條濡ゆれさるサ護身囊カヒジンノリ又其奇物と合ひるくもくも
その奇物やくよけもく一モヒハ幾十倍すハアトモ
ふーともあくとも感むハいくそくく代ダシゆうゆう
ありとハ中途まるの有りハモモ朝顔アシタマとてとめるタリ
タクハモくてハあくもさぬハモモタモココロヘカーハモ不
意の致あつてふと其ちと唇までハキスム文筆モノガタリア
みてふせんあんく又看官カニムと云ふ意タチあふれて

さうくそく輕まんう事あつてとのニ只一句も唇え
トモニテソリ、ふもめあくもふそするあつてとのニテソリ
看官カニムハソシソフクモるヨハあくもと眼あくまも手
コ汗コハラムキモカセ代にゆうありとこつもく小舟コトモ内ナリ
昔煉老アヤシシシロをまくく向ムカシ僧着ソウザクけて襟イヌもそもそ
少シり其早業アヤシシシロもれと衆ムツのうとくの文お革カニム力剽
姚アヤシシシロまことよぬ、愉アヤシシシロ快アヤシシシロ短刀と犢ハシモ通ハシモコサエコサエ
煉革アヤシシシロ○俗羅アヤシシシロ五郎アヤシシシロ代アヤシシシロ也アヤシシシロとよやくとて肺アヤシシシロもと
アヤシシシロ

必死すア有へきと化作アハよくヤキハカツの剽姚ひようのいはす
ひ拍子ひともよかどもそくさくさうのうからて刺さすも呑
へきうそあざるハ渾身ごんしんとぞ蹴けるをもとてわよセモと有
ハあれもまんさくよ赤子あかこのよと捨するめくよあつてかくハ
いとよやくめぐらもあつて脩羅五奴ごゆくう水御豪勇みずみようゆう
ササキささきすう金かなくよとくてハ放はなふハりくろばはゆ
たのの貫目ぬきめも軽あー旱ひもさうたまよハあるもと
狩かりはるもとあくよせのききあくよひとつせんむるをき
め革かわたまきもととくよつまでハ脣くちばあくよてハひあ
きよハあく○代四郎よしろう再びの水術みずじゆも化作かくす

金かなくうそて有あんを刀ときくそくざれざれる十二じゆくよてね
とさう心こころ桃ももみ合あて逃のがすハ短たん刀ときくそくおへきざれざれとえ
短たん刀とハあくへくに小月形こづがた一名いつめい賜たますかよとくよ殺させ接つハ格
ふも護まも身み囊うぶよ向むかへともよへききし殺さス萬まん一いつ短たん刀と逃のがす
たんよハ其歎惜かうせき小月形こづがたよう深ふかくへれと不覺ふくわと致いたく大君
賜たまのまこと是これほどのめを召めしよハえも有あへき配ばい割ざい
さんも米配まいばい割ざいハ精せいあくふ又前まへ修羅五郎ごゆくを追おふ
刀と採とる其時そのときの精せいをハ既既コアエアエハきとまくこの合
紋もんをよくりて精せいをくら霧きりあくす高舟流たかふなりゅうと云いて
狩かりとよくりて精せいをくら霧きりあくす高舟流たかふなりゅうの深味ふかみ出だす

百三十四回

金糸と先う投入をみてて小月形をうんのぞひさんと
あやろしあるゝをのみとし再びのふ術十ふせんと
小月形の十二をよみ術とくめのあさを文面りやうと又
收し金糸とおねぎを詠きて受戴入るよゐなうと
抜きあうて立ちあうて投入するとまうあうて立くと
しあしあとおれまへ極さんかと教ひ其老舅と称えまへ
とささふ詠きて助けと謝さうと有す一モユカこのめぐち
其敬れハ小月形のゆゑせんとあつた代郎と深く懇意の
すまきこりてそのかうがむらうさうやさん小月形と深

られくるみのところとつづへき歎み術十二をと唇をよほ
口をく只手拍子とまくせらる、せじんさん歎桿とあして
さうやうとまくそあく船よどみに内ノヌたの袖をて持ふ
などいづれの精細とくら○男狂磯のゆいふしと
よき引あそと百個千個聚ふことまゝ代郎と諱絆も
やろくお諱ばかりうん諱ひふとくふとく伏井の冥助
とをくてハ首まゝくひ覆舟の流をやうむと只自らの
よもへあくまく○雲玉とて伴當箇工們の毒と
解さぬが人をすくねておまかすことよハ呵くも
九十歩百步の丈度ハ今まうすとそー○投倒し

あきらかに嘆讃のと縛りて責向又假舟経紀の水鬼
灘渡り白状役あつてよく二人あくまでも海を
行か定合せの算盤をすくい○代は即ちの途中的と
扁舟中もさく報つて元舟よろてハ船にて其
話につけておもとく報つて元舟よろてハ船にて其
きとさうあく行者篤工们うるいふむをふくらへさせ
ハ船はうち元舟と還て、一代に舟も彼途や危難とて若
いと既よりハ平らきならず後はとくはよハ云々事
あんとあらふまことにあくまでしてかくのめみゆけ
きく扁舟中も報せいつまことさくまくよあうて元舟よ

ソラテハ者共と救ひ活一又小賊等を責問ふと答ふれ
えと其暇をうりんハことつゝことつゝ其かつて向まは危難
の二賊を白ばれて先知きつてすめぬかすくい代は即
ちまで驚かう驚き仰はよ代は即ち驚かう驚きニテモ一と
其れ驚かう驚き仰はよ代は即ち驚かう驚きニテモ一と
ら一矣つよかーこの安ての安まじ報いそきよせむじの種
種さうてめじとそひ角をあすむればいあすめ
むく○眼赤の修羅立昂詰中の査めた例の虚ニ实
文のみハアどそし篤工中あらを知らすほりて云々
云々四九ニテミ山越へひまざれくすのメ月とてハ古

ちととえどもしてゐるもやぬと例の革帳をすれ
ざる遁行文句のことをうす詔役の序説といふも
頗り。駁皮紙うちめく賊魁のまゝ猛脅ひをも
た武士幸人をあゝ大々、夫役臺ゆく耳あやふま
お居み先さこそみをうむよく隣尾判官面ア士猛幸サヒ
やうもとく群衆敗走慄くほくあユ假四九隣尾と
假告ハあくすのるコハあんとそよてハかーこの假告ハ先
声をもて隣尾俄あくとそよもとえあつ照文代郎
えこと同士敷チをキと呼スラ告ぐるに中精細例乍りく
併當鷲工們のぶ後勵^後勵^{れい}の結びをかづま

查か太々死力の暴勇賊魁^魁貫目^{貫目}をもと又照文主
徒の貫目ハつふとモレ代に郎ハ五鬼立郎と生捕し
秤目^{ひきのん}隣尾大ねせ馬^一ニ三百人ひうひーゑんハ賊
魁と彼をもひもでまほ^{まほ}わなふと直ゆ太^ハ四文のひ
ねよや^よセ^セハぬまじ畢竟之隣尾ハ賊室緝捕^{緝捕}全功のま
本をこしれ^れもあん賊魁をいとよまんハ毛脛^{モウジ}スモ
足^{アシ}ス^スハ二郎の領主^{アシテ}とこそよ^ヨ後^{アフ}モワキ^モ後^{アフ}
海癪^{カイツ}龜^{カメ}以下立人の名あ、小頭領と生捕^{ムカハ}其士卒の
もハおも^モエ^エもまきて右も行^ハ時^モつこうめのとあふ
うみて^ムよハあひと糞^ク見^ムと建^ムヤモ首級^ス実^ム檢^ムと

ほり名あく立人皆生捕こさてハ討取るゝ名をきト賊
モ首ニ交換をえまきやし彼立人討取るゝも生捕
るもあうと有り、かのへと交換のひときよろんうとハ
つゆのくこそ小車かみ芝生ノ床几と建て首ニ交換と
うちたゞ五りてハ照文代に廊う兩箇の生捕と亭子ゆキ
てつゝニモユス人あく首ニ交換ハうあうの威儀すよと
其威儀ハ立まの幸ひじのためのりふくと一陣尾
里見旧様のちと先づ一言陣尾の道えどとて
このゆきりとそくとそくとて縛捕のえどとて零人
の功と称す是又一箇の賢主ねまー本傳里見と

主とせむる事ハ三五よりみあくハ結体へ陣尾へ又賢く
いとゆき徳孤あくととくとの謂もあんう小判貢は下
の人とてうづきとて後條ほととくまとてうよア
セゐる陣尾ハ又陣尾行けりものいわこそ縛捕のはどう
つみゆきこまきこまきをみくら例のたゞこゑのま
まで羽公あく又上段百あく深一く夙ひく五鬼立高僧
以下とあれと之出名ハ五鬼立高僧かの水龜鬼懸渡と射
この白状役又三五の抬了にて射龜鬼方ヨリ予さん
をゆく徳丸合符えうしかく有りまじくおやう一
五とすまて代に郎タニミタモく 照文ウニハちと磨

つまむのやうぢみよと酒飯とお食事と謀えりに照
文徳本を慕ひて深くあつてありし他主の面すこ懸えよ
そへからとてハ有へうそもとまうあんじう隣尾うお居
とすまて船場コソうお對面せんぱりしスチトキ甚ち方を
のやうぢれと隣尾ハ一個の賢主と善と羨み一功と称え
えほくとてかゝ處所のゆゑと有はとぢねば旧姓を家の勇
臣へとくわづて今まほとくもせんぐく又え本賊富
緝捕へ船場コソ武威あととせけハその有を始まゝる
こそハ有へうそとぞゐとつととく下士の賢主
とくとく有ら一一代に郎と長話説とみ危く後

そちよくこそよふまの海賊のこゝ入かへこそも不との山
城狂又隣尾ハことぞうよそらあうてかうとハ有て
せひとよくめぐる人うめてとてあくとみ又一箇の賢主
と称えりよし多うなとみふまてふまの一説
系をとめもあくとめーと有りり照文代に郎う必
死の危難をうよまう助のあくとハ初夷こた右川よそこ
あ似へれといそも小向大里六までまてゐるハ大よた
くアリれハ眼あくみハ詰説重複の嫌あくともそも
ろんこ脩羅ユ郎うおきの上てもうあうあと代に赤
う肺と拿て刺て射すと直即太り坐えと組伏せを

を紀二十六年と机に付て救ふとハニシテヨリ一
ヨリテ彼をと射ヤとんとんとあやまちスル事
云ハ三れども照文た右川モハ綱縛えどもハ又組
伏めくらめとの事ハアふくらむ勇臣ヨリてある事は
うなる事も無と同轍ニ一度までハちとニテの毒欲
查め太と殺すて勝ひするを紀二十六年助けて勝ヨリと
よろんよとがりてアソビと生捕スハシミの多く上よ
あくと背もくちき付さるやまとてハユ今阿キアリ
さくハヤめて画面ケリと組排ひ程とあくまほー綱縛
ちうこう組伏されニシテニエハシメキムシテ

○降尾久財と捕へんと自又出馬し旗弓砲軍装
キヒヘクニ三百人を向ひ一つかの定正ウ三人の名を有の
をめ死をくろコ令セテアハする事ナレトウハ其愚評
賢示カ一・定正けのあられとは是ハヤマアヒハ仰
名ヌララシムヨリとぞ牛刀タモトアサヒセ
一トヨクサハ降尾さセテ大身アモ郡領そくの一城
主ニタタガセナリマサモトノ財と捕へんとぞハ自ジヒフ
ヘ出馬モハナハ軍裝カモラン治平の事とて
又ヘモナモニ三百人ハ用ひふくまニシテ賢将敵ヒ偏
正と輕とあるまひエカアリとことより代々傳うカ

さるこころの左のたの旗一旒もうのをとてそくて
かの花もモー羽又ち伊近はまくすみも有
へきわふとえびすが出現すーも一個の寶ねよあえ
そく、有へて、牛刀モハあ、モルウ○**誓**
余の多曲とすきてえ伏姑の冥助とあむる、
天助あつて危モとあきつて、あめのれと有
ぶと其天助とあても神助と蕃山とをひくぬ
澤尾の助あつて、あめのると新んと交代をゆく
ゆとて、恰好おもなうたきと又助くたに、伏
助引振の神助とほあつてやとを助ふと伏助と

現玉出でて、召玉とて、妙こ玉冥助と云うてゆく
こうともえの首官ハ玉とてて、ハあ、あふとぞそれこよ
大士们かうひ、大代は郎もいこと、こと、うさ、
婦助のたかし、あめとおえよ、大士大代们るとて
伏姑の冥助をサギヒシトヨマリ、信心丁寧と
召玉とて、うかのめくよ、うかく、伏姑あくよ、うれ
ふーー○**記**、幕四文代は郎、助と称、あれと責め
きハ記の記、幕四文代は、うかく、伏姑あくよ、うれ
犬田大助とおえよ、うれ、うれとぞー、兄の孝

義忠勇とかまく奉るがまさきつゝあらう内
しく法大をかまくらむ有らふととてハヌ文句を
くわくるの自ゆ筆 紹興う餓させたまこと仰天含掌手
いそくハ余生の情態ありてうるそ一からむ一面白
すちうかおもつて一抑ハいふと伏説の伏説も危
きもあきと村ふとまよ神謨あらざるをまへてあもとひ
ほくと召毛トあふか一抑のみ道異やもひもうぬ黄泥園
きとうかふ一坐て奇めあき一抑のためうとすとハヌ又
やよ餘みまく隣毛とまへ株者う出現ト紀ニひみそろ
そろ直すもすて後段のまごみぞ又代に郎是までも

老勇誠矣工もとありてきりとまへ一役者よてあもと
久暮希又一段立て役とてお叟みてそくてハやめ役のア一抑
の脚色より自然このへの三語ごみ役の謡曲の檀風ふよ
いある服能とうひすぢやく死變めあテ幕希コナリタヒ
チ傳厚子う実意とハ伏説も實うまのこも伏謨まで
有ヘシんじゆまやよいしまちいのあテ暮やんやく善要の
たうひへ雲を壊せんと被取虫う跡こよ意外の三テ敵よせ
よゑく妙壁の跡こよまくとヤ一章テ得す成るも本傳造
化の自れとソアトエトがくおもとカニ郎尺ハハ父志
コ勵とて忠義のためよ戸田河の一勇哉もとあくよくたぢ

神慮めくみあそみて奇よ遺すあゝせてニ世力尺俊栄
ハアリと幼稚るがへ本傳よひまことえあせうじようて
いもく教子一能父史のゆゑとえまくは二子のそえと
も並く房ハ三義死して其子大士うち
力尺ハ忠死して其父大史とよつておみと又被造化
の自命配制のなきとこう教代に昂クササツモセキ
あつたうそをせ抑一人教養うなみあくとあつて
慢むとあくまの仇妹の神慮あつまくこう例の著寫の筆
心深きよつよつゝー誰も掌うと今もとあくとーしく
代四郎う慰も言葉又深切さてそぞくへ急務よあ

そと後條ようつあくるうづふん二ノ例のすねうねく
○代に郎とあさの監護とと御詔の事の首尾と照文隨尾
よ報うやて後詔の便利よふとて又菜田山よまへ走
事の便利のこらしあよ走りるととハ向へくこゑみ
あよとくやく報ておととまくまく薺山よまでハニ子舎
町と往來二段の波方と黙敷とまくまくハいふとて
そくそく詞せとくと音とよつて詞のもうあつて
老人の氣せとくと音とよつてスヌマモロコ
そいとくのとあくと水中のとくと再々のまくわく
わくわくの豊饒とまくと再々の走至まちとひぢく

手てもよきよかなるもあらざるもとおかれま
そくを煉丁寧又多くあくちゆゑ入せて口音もて
おほまことよ代四郎と十日よ唇もてうといつへーよ
くもかくど十日よ唇もあくらぬこ[○]故唇衣裳
をあくため隣尾を待つりもかえく仰の精文兩三
人を眺^むる眼よちーふくそも替えかくそ省^きね我よ會
んとすまとまとと拂巡^{はらまわ}とまると有り又うへーあよい
め隣尾^{うす}ハ拂^は巡^{まわ}とまるとかーこそハ衣裳^う
令んといひて拂^は巡^{まわ}とまるとまよハ我^わなとハ手^て拂^は
とまつとあ相互通じて自ら^と其姫^{ひめ}と唇^{くち}を一^{いっ}す

さうふうさかよハ吹きよ穿意^{うきよ}あみをよめつて
さみよ幸^{さい}きうんる^ると^とて唯^{いづ}はとそく文^{ふみ}上のりよと
よ唇^{くち}も^もと小理屈^{こりく}所^しけとあるかくとせよハソシキ疑心暗
鬼^{おに}う右^う上^{じやう}穿^うとあうとてハ何んもまく^こ例^のの癖^{くせ}あれとそ
も^もと又^{また}例^のの何んのちうよヤ^アてうん隣尾^う今日出馬^でや^ア
賊黨緝捕^{せきとう}のため^ナ五鬼^{ごき}九郎們^く白状^{しらじょう}と今^い人の財物
脩羅^{しゆら}其^{その}餘^よ船場^{ふなば}もととすくらまく^く犯^{はん}罪^{ざい}の^のすき
といひをき^きう追捕^せをすくらまく^くやねむの^のあ
今^い四^よ又^{また}代^{だい}四郎^よとつとく旧^{きゅう}緒^{しょ}家^{いえ}の臣緝捕^{しん}をくわ
難^{むず}をね^ねく^くてそ^その^の奇^き童^{わらわ}も會^あそく^くふれり

て兩人ともあひとくもあらもようるを、船場よりてへき代
ゆ文う衣三名の智富力といへとて緝捕そくま駆龜とし
化家の臣よまうせアミてかめくはんをとくは先退きどろ
林衣ハ兵城とあまてひやうとハ兵城とまくは先退きどろ
あくすと兵よ查知大、其鎧名あらもたまハ捕へて事
ちよハ其金ハ乞降して撲馬^{カマ}出四郎^{ヨリヤ}よあまとしてす
ちうぬーーとそのさよかくとて、那傳^{ナツヂ}よハ下呻^{シミ}
と西^{ニシ}よハ山^{サン}の城と緝捕^{イヒボウ}出^{ハシム}之^ノ取^フと捕へん
み^ハ今^ハ山^{サン}の城と緝捕^{イヒボウ}出^{ハシム}之^ノ取^フと捕へん
准^シ内^モをさすハいき^シくさう^シく其功^ハと後日^{アフタ}又^シ

準備^{スル}てとお遠慮^{スル}を。或^ハ照文^{アキラカ}ノ御場^ノ異変^ハ
止^メと既^モ時後^モとんハ甲斐^{ミエ}をまくよいそんとうえす
あくすみ城^をほそう^くとて^{シテ}外^ハを掃^{ハシム}のんとよすな
る歎^モこう^スれ^スれ^ス其理^と有^ハあれ^トと教^{ハシム}何^トか今^ハは
心^のを^シむ^シう^シす^レれ^ス主^ヒひア^シ主^ヒと密^ヒと^ハ
輕重^あある^ハも^シく^レ隱^ヒ尾^ハほ^シ又^用あ^ハる^アあ^ハる^ア
玉^モく^シか^シこ^シを^シえ^スる^ス軍^{サムライ}出現^{スル}一^郡の領主^{アシ}し
一^株の賢^{アシ}れ^スてつ^シ不^レ重^{アシ}れ^スと密^ヒす^ハえ^シう^シと^ハ密^ヒ
ふ^シま^シて照文代^ハ郎^ヲ射^スとの復^リり^ハ其^シ氣^{アシ}と照文
代^ハ郎^ヲ又^シ輕^シ一^次や^シ教^{ハシム}と^ハ教^{ハシム}と^あよ^アて^シく

陣尾士卒とおで兩人ともひきひとと駆せりまゝが岱
郎^ス走ゆましよ回^スくちやうとおまゆう水中危きあへ
駆せりくへき代は郎一人走ゆる危きと助くる此後
深坂又右水中の一抑^シせん其餘^{アマサ}てハ詠^{アマリ}るを
衆賊をトモシテ一賊^{タガ}を追ふ黄金と失たるみる
寂落^{シカ}とあつてこれも勿論眼日本主^スる肝むのをえ
此後^スの客よからん陣尾のをよ調子^{トキ}たのよとて大駕^ス
と駆^スフク^スセ^スて眼目深敷^スと混雜^ハアセ^スれ^スりんよとて
ゆく調子^{トキ}をゆく^スセ^ス城陣迎^スと詔^スよく時刻^スとえ
令^スをセ^スらむる^ス主^ス客^スと於^ス室あふ^スさとひきまよ

陣尾のをみ小理とのミ實^スちまよ^スハ狂童^スとよくし乍^ス
そじく^スうだのそ^ス照文^スとあよそ^ス理^スつけ^スそ^ス実^ス
ハ故^ス無^ス帮助^スと金^スセ^スあくる副使^ス正使難^スあ^スことよ^スだ
ドの大士^スかねあ^スも副^スとそあ^スか^ス貢^ス秋^ス金^ス并^ス諸品有^ス
モ陣尾^スうその言^スあ^スと^スもえて走^ス人^スくま^スてや^ス
言^スあ^スよ^ス築^スつ^ス貞^スよ^ス居^スア^ス居^スハい^スよ^スあ^スと^スよ^スま^ス
エ^スと^ス是^スも伴^ス當^ス其^ス餘^スひき^ス走^スゆ^スてハや^スる混雜^ス
あ^スと^ス是^スも伴^ス當^ス其^ス餘^スひき^ス走^スゆ^スてハや^スる混雜^ス
スマ^スと^ス是^スも伴^ス當^ス其^ス餘^スひき^ス走^スゆ^スてハや^スる混雜^ス
是^スもかつ^スハ向^ス一^ス輕^スとあ^スべ^ス○陣尾^スとおまゆ^ス

双方口誼くみより飯ありてやまきる。金瘡覗てぬいとぞうもつも
療用し復興はつき乗せ猶城内よしろを顧さん故と曰。澤尾さわおの
妻めかこゝなりひてハハシミシヒシヒ者ハまなこも行。澤尾さわお
ゆきまくマいすも一株の賢主けんしゆとづべ。およ端はといひくる
は旧縁きゆの其由そのゆとぞうと語かたする語かたくまの下したの序次じゆじハハ
動きハキきキ右うひひハハからん実記じきとある。しか
へくあとも其その軍記ぐんきとある。あわく今いまよよあは
えをりうみかみく一賢いつけんむる昌まさらら。食糧じきりょうの人ひと
さうさうハハえううと猶後ゆこうも結むすひあとの人ひと。感物かんぶつ
事ことこれと興おきんとある。澤尾さわお賞功しょうこうの深ふかきとある

そと言ひて梓タチバナ代だい即そくりとある。他ほかとある
すら、毬直タチバナ打うちりとある。勑がれれと黒くろひひ。一直言一直を梓タチバナ
亦また思おもひの足あしとある。又澤尾さわおの賢けんとある。多く
多くすり有うて榮栄のれやうと一段一段かずくかずく。後あとせせる。
澤尾さわおと召めし。又代だい郎ろうと召めし。或も澤尾さわおとある。
もうて教くわ義ぎと称いふ。旧縁きゆとすとよて。今いまかかる。たたくこと
て召めし。召めし。よわよわよわよわ。めのめの。よよいとく
かかうらうらと互ひとよよ。さとうにきき。有う。他家ほかの臣おとこ
感かんせせとある。又また例たとい。ハハえうう。三人さんすす。あうう。の勇いさ
称いふ。そその三さんああ。其その功ごと領内りょうないの強きょう賊ぞくと除よされた。

隣尾すとぞと賞謝せうてハ有へうにこよあふへま
太刀の臭ふとあゝみハ感がどりておせんとわへさ
るきゆことよされあれととひ餞さんやよへて我を高
くせるよあゝモ遜詠アヤリうきておうおもへていそんとや
とおひくとじきとかれを義みとありのと青くよみて
まつて隣尾よハ過まうそくらあくらう動搖と面色えう
くハ義眞ヨウジンと大の推緋カツヒと果と氣のみとものとすのをう
しよハ乃それとそハあくけのたうひハ有へま、矣と
ことハ事大は奥カミナカニ代口郎タケルうふこういふも直言も直言
ちんと二人とさあきて我三か照文アキラハシ袂をひくよこま

に思ひのまよ咲きたる隣尾の遜詠アヤリを合せてハとぞる
遜詠アヤリてはハさがくとあくられキモツアヘミシトare
と隣尾のままで召せんとそ代口郎の不まのすと召
へキともあくと右坐文袂をひきてハとあくともそハ其言
ききとそめ一まとおもてニ人と其安れと隣尾よ
ひうひて召ひそくもよの言をそく感がのすよおまそハ於
かうて一言いそしよさうハニ人も推緋カツヒをうん日えせんと
二人よ辞マセドハユ今あきゆゑ代口郎よお詫をうるて
えく咲くとよせられ一ハよう鰯直アラマサあそそもお一え
よ眉毛アラマサあんう三人の方よ過失のすと召えきよあ

まハ他家の感応ハうけらるゝと本理にて隣尾の方と
あひあやまうとせられやうふれあれと此不^レ代に即り年
を取そんとぞがるとして隣尾もすがまどとせらへ
るよもえもあらもあもつてめくらすいふと合きて云
わとおひいためしおえすべからぬつゞハ理論家
設^サて著翁ハそうと召モ一あくモ只^シおはるの貴
云ハるの直^ツみをもとあるので隣尾ニ主
近のすみとそへれもとことよくあらず
ひえと寧^シハ益^シきくも有^シ○靈玉^{ミタマ}て治^セ
花の毒を解^ク神ニ^テ金瘡を療^ス故^シハ^シ

奇め^シ海艦と隣尾^ヲ借^ムす故^シより貸^シて便利^ヒと助
^ムて隣尾^{の方}する故^シよりそら^ハ史^トへき^ハ船一
艘もひききてよか^リ荒港のくひ会^もすりけん^メる^ム
あひと北海艦の船^ヲかか^ムみ^シめ^ス於^シる^ムと隣尾^ヲ請
ふ^シえ^シゆ^キる^ムといひ與^シ文^ヲ談^シま^ス乃^シひてそ^シを
解^ク隣尾^ヲ其^ノゆ^きま^スといひて借^ムきよ^シぬ^ハも^ろん
ちれと往^カ前後^のま^スう^シ精細^いふ^シ教^ムる^ム代^ハ郎^ウ
今日の武^ア功^ヲも^うて^シ詔^シま^スて^シ本^ム了^シ罪^ヲ停^スん^ド思
慮^スふ^シいふ^シお^シ處^シこ^ムす^シハ^シあ^シの下田^モ先
報^ケて^シま^スう^シ再^びま^スう^シて^シ本^ム了^シ罪^ヲ停^スん^ド思

ゆゑとおのと別よ故モ一ノ武功をもつて
傍ひとそよまで頬いと経一下田にて教んとあへ中央より
海船か一こよハ有へきりと彼よりてハ教るの所あくま
ゆゑ其のよハ及きりしよてかづきをしてそらのそらへ
そハあきりしより彼條より不報を既ようと解さ
あきりふと今又そよて再あきりよくかへ不報の不
とあきりようてまくらへす。○紀二六とほよと
のるいふと勤うを紀二六とそと辞さるもいふとち
あすひつめく外とどくよほと直あとうからくあじの
御そめく安房への順風ハ夜のほとよて曉方よと吹

かぢりて西へのおひて奇めぐく前よ皆亭午時候よう天
霧で今宵故羽三の旦用は必追風をひくと警工們ひす
のそくしてのまう安房への船も暖房ハ帆易らんうとそゑよ
も又合紋と合毛をあれき五ふくとくとひくと
夜間暖天をひく順風これ又例の神助も右へ一祭眼
スミテ中毒金瘡神薬二個と缺くとく大江ク一抑
るをくさみてめくく出船の神風歟

百三十五回

紀二六安房よりて書翰とことし於その詳ふと告
七犬士照文を事崩ニ日うちとふとあきりよへまふ

至れとまで順々云ふをいふ事一とハシ
その社今照文の旧族ある其るハコモレトアリある
と常ニハ用事の事もあらモアリムト今ミヨリミ
アリマリタクホシニ共倡ニ照文の家よりみて
其事ニ詣きましの故ドナス其ミテ崩三日ち
同城内リテ子の職掌照文の下さりて是ヲ訪ニキテ
恰好をよく社今會へ後にて代に郎助と老候ニ言
上と托モセよ候合便利又ニ自らの教命にて
さうぞひきつけをしてるハソハソハアハアハア
ニテ益々言上と二人は任せ托モ代郎助の事にて

玄蕃曰くの言をまひ言だぬやうなとそハ内言上
表文を改コ先候の内持揮にて別紙を除て奉輪をカモテ
稻村ニ言上やうむこハ内こうそニテ後モモハツア
内えようて罪あるま代に郎をもとでかへこころ助とリテ
償ひと申すと申せられハモと内言上のことを王と申す
それ言上まつきてハ裏表照文うる強賊のまお西をえども
モアモモ申すと申せられハモと云ふ事ハ乃モ申せられ
モハシテニ士と申すと云ふ事ハ言だぬモハモ
其言のまきと申すからて藉と云一とてほめ候のう

ハシベキナリと照文を書じほと差ゆるを仲を幸ふる
まゝほよん彫りきく本輯外よぬ人ハひくとしどよ
名ハ桔木ニ元始あれとりあを元モ有うもとてお跡を
彫るやうに画工の筆の元ハさるすれどもとぞ彫る
くらゆる紀ニ六うえうるよううはうるあううもえ
すみて不教今ノ狂紀ニ六う教つましゆハあいじうし
○ぬ真かきのち大士とみかづひて莊今ゆを従う
ちかの危難又の勝利をあやふまゆうひつ時とう
くろゆーのゆとくよみよおひきくとうもとくよ
らひよくのゆとくよくよおひきくとうもとくよ
らひよくのゆとくよくよおひきくとうもとくよ

介うゆあくて少の便利をうるよニシテつふを教ゆる
そめううのすれと狂其序とぞみー小文吾現ハ
孝嗣们うふといひ教ふくらうといひその洪福といひ又自悔
いひ大角うえと金大のうあつまス又云目崩三の汝終と教
間のめ後をくぶめ真あとのひもとの老母をうへ側うとせ
石ううう欠伸セーとみと其詩よ孝嗣們う詞とまう
へくとあくみハチヤととみと其詩よゆうやくとせ
特しめく感ひよこ化作あくがの欠伸ハセモヨ黙トと
まうひまてよやもアマーレシテヨシテ孝嗣們う慨歎の
意よとめきる厚義丁寧モト一をぬ又うくと

伏狀神助とふの言も古へまじよ其言のあくまへいす
天そりよの儒論のきりるるを言ふまじよハアシテ
まことの現ハク言は水路ト封くも大田大川の教諭格言と
あう彼等ことをまつてひまハ犬田と犬飼と大川ハ諸犬と俱
まいひまのことを別にヨヒする言ハキ一とくふと年年の紛
毛トアモー或ハツフク犬飼の名ワタニシクヤシユ召シテ
○目崩ニテ夫簡モ報承シテ老候の例のモナウ
稻村への言上小文吾道ヲナクスミの指揮ヲテテスムアシ
勤ラタ代ニ郎ニ條サシシヨ別旗シテラシモサシ
おまう書翰賊難の往進も元トアモリテモニテ代ニ郎

ケヌトエ専あハアシムアヘバアシトモテアヘアシム
ト注進ヒ債罪ヒ一紙ヨハ昏混トミリヌ本紙ヨ賊難
の始末照ヌアシアリテウタ代ニ郎のそとまき尾尾のすと
エミト注一さうトエ代ニ郎シモテ船ヨ来シ何ト
セツシテカネのゆゑト債罪セシムル事モ
別キヨアモヘキシトウモ理屈ハアシマレシキ事
章ヨ別紙アヘモトウモハ當牙ヨアシムタモアシマレ
チヨツメト理トモトモ是アリモ別紙アヘマシキ
セシハアリモ奇めのトヨ自らの精モアシマレシキ

めこく。○ニ士言上の朝早く老候の目と見て甚而そ
くより内もほ例のとくを假すふとこれとて義理うえ
やく其るどりのあうて今又書翰於ニ士の言上そつま
をゆくてゐる子と頼あうほの人とよくかくやうて
頼をそぐてア呑き一あうふせん使がふと呑るものこそと
ゑのそらんと折をとあは我も亦使とて三とゆうして
あう微細をうへさせて歎仰をしてふハニ士の武功賣義
の外をきる所あくせんと大事の使とそかうもよ一リハ無計
よえきある所あくせんと賞功をもとめに敵ありへ
きみれともきよあくせんとぞこのふと這方へ歎仰をく

よアアもあくせんとて大士、老候の格ふよもくとて以
外孫も准一ふとりそあ、愛臣のりやうあくゆう内使老
候の老候たふうといふ原うあくもいあくも。○兩家
老うつまう玉命をちうんはとむかまそ一帆寧領のるふと
已きて積くニ天士すり櫻馬への謝書いそみかくこそ紀二六
ク情願忠意をわくも称まへお若黨あく穂北へ途由
使やうは姓名あくひ只そみの使のまやうと有つては
あひくよ貫目をあまで今うそへ然後や人の狭野井ニ郎
かとまうハくと重みの人とあくう兩個の奴隸ハあく至
するハ大江のうをま事のうをすあくはもをあくいづみ

もや其人をと俱し中の両側をバヌつてゆく
きりととめくとおよくすりあよ紀ニちとくま
の照えうきをみて紀ニ六月より事上廻けさせとる
し使をもほとさればキアリ西奴ハモクドトキツモ
ルシム者をみハアリモテスルをまく紀ニ六月モ忠意
モラミシテスリモアリマアリ西奴とスロイ
フニシテハ奸心の紀ニ六月モ忠意のスエモ
一兩奴をあいみさとあんてモキムモ紀ニ六月モ配剣
ハ精とアリ○道モ小文君港にヨリテウタの櫻馬への謝
書を承寧領よコロシ猶御言よかの舊文主の君家

の教ひをもとよりおまえうちかまくまきあうおまいどる
むすみあうておもうえよくうかうニ士ゆうとい義威召して
おえ御あきとゆてはううニ士其夜ハ城ニ宿レムア
の言上モ命令モ兩家先執達られ表向き大士们ハタゞ
それのみともおへうそこよ面談官城までおまくま
おまくま深一ノとモ力をぬるあれとおわれおもく
そめくまおまくまひとつけてお召セ一あくま○隆尾モ
おれ城五人をあまうむじゆう苛ます身の波打際の尾
嚴ミコロモモコロモコロモ身定今うちおもわうただ
コロモテ澤尾の眼ヌヌとくせーおもん人と殺し

すもといまあつてほどもそうわいふやまと後をえ
てあうのよこよまき測りべきあつて五六賊も其
時よ投殺しとくはあつて只うちあやで放下へ。泗
道をふくのうへヨシと疾き泗法至めあまきばのうを
そ溺死する奴を傍う殺へあたてこよひあくタか天罰
えや様とおれ三属バ要人といふ傳きのとて超える
のあらんよハこそそのゆゑの精とおひき。○申明牌エ
テニと画せりかくとさるく苛子港以すの駿昌コクモ
るあのむきひびきらきるハ既ヨ高ヨツヒカウ。降尾ミ
とニ主の武徳と碑うて苛子寄コ達ラスケ。

過事こうやうなととあつての感せの餘言すほつ又
化家の臣とく其武功と處一賞てあれとたて領内
さる碑と建て徳と後せよ貽ぐんとくまね心をみ賢も
アヘヨシ五山の豪僧の渥美の寺よ流寓て在るよ召
めくととハ其ころの時代とひそうとく精と底もんさて
碑ハサウキ」よ達やる力尺のと小説をぬ。洪波よ海
ユノ居設と例のゆきとまちもひこう。○那寧領
紀二とあるひて機馬の家よまう謝書とまし謝言と
アヘ賞錢をいと報け紀二六浪速よさん的情致を
アヘ伊近さんと孫馬とうやまて紀二六と便承のゆ

今まことに皆有へるゝ事にてをもんあらう序次述漏す
紀二六十九年からうる早くつうり同船兒と敬りて船上にて
故人およきる起二六再船の事のひよひかう金へえどうふ
と新装善の革とアスベラんう○親屬う船浪速王者
にて先代は郎と遣て京師の光景を探らしむと
よかく者べ例ゆきうそくとび探知役苛子は事を紀二
六三と在あく。かねてはゆきとおもへれと於代は郎と
ゆきしかりハ此叟うせきの近從みくらうちきくよそと
らじや代は郎探うおもとおもへくうちきくよそと
して足利の衰、癡應への乱根を説きまつてまよふ

てあとも其始終をつぐさんとあくまに革今うりとて
感服やう腰障のみ便のみなといふ。其本直後のほと
かそれ思ひて貴と諷をく敗と教言もへく世嗣の
より行ひてりふとそーが條たく足利と設るとのこと
とくひき條ふくらや又義端義教義政義輝ふと公事
ああもと人よくあとと高尚はうあととて其賢良
またハ人いみじくぬう多きと今これこそかくいふとス
けの有益し富余の歌もあれば想像よひうきて
正極めかくメ司く以て考めのう桂窓うほくひくと
ゆくと考とてうきて當領の盛福あらばうと向る

さあらるの堅剛系記庵にてぬうをすをとふ
復らるるもあへまなれどそハ即ち次修上家寧ちうを香西
ニ就てと有なれハ代は郎と言復さまでよ乃ひ入ハ前
文ニキテ察らるやせんハ云々者モトアラリアリト
前條奢侈衰廢と説まくと其詰のどものハ御科モ爾
乏セハ銭財を主と教訓云れとまゝハコレ探知の用
要されハ説詣とくとあひよせてユ合うまくとおこまし
くふめこし國心○政えう郎よソラ先家寧ちう復古
ニ就て來意との義成の呈書土宜とまゝとてくの云
わちろんに復らるハ後は代は郎とモテ贊代の二裏と贈

至る云々勿論ともうんハセモうんぢれを復六家寧た
ハ既ニ就てえもひつまつて本ととくわと呈てまづり云
一の信わと同志一とまくうて照くよあくきと復連う
あきとひそうてはよおくハサケく遙くあくまやよし
復六への贈ねと長成ようあくに二人うちかハ主人よし主人
の縁わと口筋よお急どう別ニ使して歸ぐくりハ彼の本
元ク伴内へ袖の下とハ事たゞハ初から今まで復六は媚く
云々まあくにさうゆゑよあよきわおまなとハセモうく小
首く旅宿何のみの心の御きくとくと語まくめし
それハセモえとおとお一裏黄白のシ寥ハスカラムのと大諸

侯の使者より管領の家室へ心えうの蟄代とすかへ
ぬらむは黒日のるとて丁寧に囁むとてハ詔をもと
うそハいもんを局照又ハ清潔の玉賄賂人ニ媚ゆ
るせとハセキシメとスモハリとあくまくも情あくまで
諸々萬端づら毛とてある細筆の如ク一モのるまよ
戈のあくまやうとソモカムシトキナフハあめう貪心
のゆゑよあんう○義高里見の呈旨とて兩官領の
意見を仰す政えとて政えとて義政政えのまゝと
云義政ミミ義高ハ別にアサムモく義政政えのまゝと
議定すうるもあちこひ有り但少義高父意を管

領意とよまくして一議をきとおとも當時の事とて
論じあると政えりふとこう非理あんよハ只と一言あ
そくハエトあくもあは賢ナリとあくもうあくもよ
幸うて政えりすとく非理あらハ一議をきとてみ
賢ナリとくしてがんよハ政えハ權臣と今うよ
そくの理ハ肺肝どうかく口唇どうかくらわとくそくハ
あちよことた一一眼にいふも忠信の致を所ことよ丁寧
首尾とたゞ本とくるをみと賛成してえく理
議ハ肺肝とく口唇とく只腹中どうかくらわとく
義政をきとあくもとモ○朝中の詮議るく

ヨリおこなはと譲るゝ所ハ是モ二眼白にて殿下行
テ裁ひ等めし事ニ用捨あらむ言ふハ權ハスモ
ナレと正もつたのでいキ。條理あらば、正と權と
讓を合へて無裁殿下あるが感心こと、寢ます。す
お回の改姓示談の事も、ソシヒトノ例也。我國何より
ある義を失ひ、義既古例とあり。遠く賜姓と朝ニ諸君
ある其尊上の意と、まみせらるゝの言ふとも可。今一例もあ
んうと、ナムモハ狂ひぬ。ナムヨヒくまもあらうさて
ナ詮議。あくまく信臣は賜姓の例あり。されハ、失ハヌ
エモフテ、難義の事。どうぞハ、名のを義と申せり。

ヨリおこなはと譲るゝ外孫を称して請申セラモふそ
ち詮議中。日。又其事、ナムヨヒくまもあ
ナムモ、ナムヨカリテ、アタシナキモ、ナム。正革謹也。
其正ハ、正として又眼あらとの勅許ハ、義政の執奏文の意、
元も殿下の裁ひもつま。不貢款の賞、コトヨリいき
ほひあら。犹あ、原記卷之代官の探知をと听きて、
コトヨリ、あらのと義実もあら。モ、前回より、め、豈
志さんや。陽ヨハ、諸姓の義を、陰ヨハ、御神體を
補ひ、また主意を、アハ、ひとつのやうなれど、陽ヨハ、侍科

補闕して陰は請越と主とまことハ其のまつさをところ
大ニ違ひあらあ回陰陽のすむべ一園目うそさま
正事ぬ革履をこまるとまく自らとせまとして
併せき初段をちるさくほう朝よりとも時ハ時事、
すうて賞賜あらせられ里見其忠実かくのめく
すれハ里又は買姓の嫌をまハニえもうて朝モス賣姓
の嫌を一とソヘー作りあはれハニあとのまかあるのよ
萩向こまやてさるの新規非例ハ常あるとかく條
理をとどめて正くナリよくあらまよ(一深く感まし)
勅許の宣旨を室町下さん室町うひ道教者をみて

正じ下さん是又曰く條理のところ他作あんよハ勅
許と脇くよ矣して朝廷へ召して直モ下さんよ脇も
あまうするまうさうるの脇えくさるハ勿論あらがく
のみきハいうふもうこまきをまくお○ まう政えう郎○ 両人を
召一時もとふもとまこと當日室町へまわって云て改名を
ちろんかえりあハ別ものとまことにそれと夫役们途中
漫語やととあと折例の精あとけるを○ 訓義う進止
礼儀を失した熟く者めまかの十六の美女年昌方にて
ク優あざる松間の花のこもとといふつとえ有えと
まくす黒いやうもうー其日東山殿へ詣て四三日ハ政え

俱やみて參内して階下ニ拜恩朝貢を收斂所ニ坐みて
退かセラ東山ハ事室町ヨリ一ノメニ省筆セラシテ
朝參を二句よすとつめて畧セんと示煉筆感心シ
○さて妙もものいつものものとばやうかそうて段との文つま
まきやせとハ御の段とちり東ニ三行乃至ひて忽むと
文意抑湯の禍す湯出と外すといふお奇之歌の虎
をあ輯のち、後よんとああまはさてハ次輯よ其のの
有あぐくと案やうら又抑湯も詩の意までくろく精
知セラシルと美齋公ならぬの義額髪にふ柳セ
れてほと脱さるさん獨行五園しその横骨奪胎セ

久もううへまやまもモーまーてやそくも推一物
婦幼ハシシくはるヲモ就キ、ハシアラヒトムカモシ
モシテ一の後めと待いモウラニ霧ニ聞く毎移卷紙の
えあくモ丁取リモ大さの定限あつとのアキモカ
間際モモ尽まつて二三行ヨリ例の又後輯セラシ
エヌ奇とあふく、あコモヘモス一器とみりニ
するモと擅てあくは自由自在筆ハ感心とも感心の
事とあるふう也

萬葉翁精評至極一 盖世人寔乎是知音中の第一人ある
名一字一詞ともありて見過もよどみぬ、宇宙の間今昔
參比詠すへく思ひへり。卷中本評ハ精の又精ある者あり
主當至妙。一歎三喟誰がは是を加えんやあしも只憾る所
ハ昂々所云評者の五極を犯さへ言多きくあれらの愚妄
以下よいかん蓋この精評中第一の佳妙ハ第百三十二回
金碗姓氏の段評定二題當言皆作左の音韻を資へく錦の上す
花を添へる如へ便足評翁の眞面目あるへり。呪文
化の忠臣者官中の御導者といひつへり。の一評ハ別
物と取れり。りく印れりて世の小説を終むるよ見せまく

ほり思ふべれよりトテ百二十回ノ後百二十回の
終り。精詳も穏當かく佳あくまゐ稀。之そく中よ
例の五枚を犯さず。詳もあれどあるねとも至
らぬ耳よ。又えよ亞く佳詳ハ第百三
十六回左右川の段かどもく一言一句空矢アメヤ
く。その他第百二十七回より第百三十回までハ詳考
の異論脇筋を多くまへ藏され。且ひちうこ
あれと其異辨異詳の愚妄よ呂鑑。テ難せられ
とてかく少ふあく。思ふ餘案を見出。テ難
せらる。至當至妙。あく謹て詳覽。且感服せられ

も事何せんその評論皆立本を祀られて或い假をして
主と奇て他らんとを承め或は只理論好憎をす
て評考の如む所へり附るの之公論とあるされハ吊り取
る所ニ今誠ト其一二をつゝ星額等十異僧の造立
声ける石碑を本文よロ妙工奇絶とあるのをみて其形
狀を詳よせざるを外ひめてかよかくといふ化多の本
意よとこうす却く奇怪至妙のなりハ第よりて具子去
きるゝあかよと精工奇絶とのいふもの形状を真
よせども看官よいりあるへどと思ひしるゝ則奇異なる所ある
て思ひもりう況又星額等う人のねまぬ良石を

土中より穿出ホリ一
夜間石塔摩ヒトヨカニを造スル則
精工奇絶ある何て又其形狀を曰スル是化者之の
事意すて生像ある石塔ハ化者之の事すありぞ柳古昔の
石塔ハ五倫塔ゴルンタツ役字ヘイジ今のことく戒名を署駁せハキ
今襯倉は還シある古昔の石塔を名々徵ツクし皆是役
字の立倫塔リョウタツ三四百年以降ハ戒名を名々徵ツクし是れと
も皆片石とりく質素は化者之の石塔後世より星
石を木に換スル木塔摩モルタツとあれハ此の本文ハあること星
額等は化者之の石塔摩モルタツ何等の細工あるハ然る
を精工奇絶といひハ歸幼カムヒは奇を示す文中の花カサ鳥トリ人の

14
ぬきの良石を土中より穿出ホリ一
夜間ヒトヨカニ造スル是
是則精工奇絶あるそりよ細工の奇絶といひ却て済スル
ある然る生像モルタツ普通の石塔の石塔を画スルハ只歸幼の
見熟ミツナリる處を旨とせしの化者之の事すあり是化者之の事
すあり是化者之の事すあり俗ハタチをうして賣スルあよなハシマを詳スルハ云
豪ハシマ思ひ足ハシマ所云假ハシマりて真ハシマと取スルて備ハシマんことを
永ハシマるよあらや○又七丈入房セトウノシロ而候ハシマ初拜見の日ハシマ
里見家の服章花号モノヅキの小袖コヅキを賜ハシマりてを飽ハシマぬとほ
云云と詳せられハ云是ナ事の一矢ハシマ和音の詳スル六相

元へくも何とあれハ今昔君家の制度規式又継舊日族の子孫名家舊臣の後といともいまと、自見せらる以前に支度料とし、社祿時服を賜るべく、この故に七大士官ハ穂北より見參科の衣裳を准依せり。さて丁そ見參折玉にて武甲冑大刀あると被けられ、親王侍り富山より生現して老僕は見矢アシ。且大功あるをもて、衣裳大刀馬マサニ、賜り、と同じくもあくへ七士官も見系せさる。以て度々金を賜り、といふ事と難せざることもあらず。金と服章ハ其義同くも、金銀、目見せする者あも賜る。と首も今も常はあり。君家の花号モノツキ、衣裳ハ目見せする者。

賜り例も、職無ふゝもろゐあるへれ詳翁のかまくらのよ
よ歎ある。怪しもへ。又苛子崎ハシタツキ、厄の役は照文を詳
してこの人勇士ヨリヒト、すあく収とも左吉川にて、籍相シカクられ、又この
地方にて查勦サウジ太は組伏せられ、と生像モモラ画イ。而
あまうのゆへと難せられ、ハ理リ、あや、似シよれとも、すも又化
者の卒業スルへ、何とあや、照文、左吉川にて代四郎と
俱よ衆敵シテの爲は、結組シテられ、親共衛シンコウエイ、救厄セイエイの生端モモラ
をえが、況又苛子崎ハシタツキの賊厄ハシタツキ、大口オロをら夜ヨ、义五郎ヨシゴウ郎、
苦シめられて殆溺ハシタツキれんと、され、胎タガ文タガモハ查勦サウジ太
組シテせられ、と辛シひかれて紀二六シニシキ資助シテをゆく相撲シテ

小主すけぬしよりあくニ職の究勇くうゆうあり之のニ職くわくうくのトヒ駿しゅん勇ゆう多
力ちからよあくよあくハ大に垂たれ濱はまの功おみやげをうそうそもかくかくれハ照文てるふみう是
等そぞろの醜態くじたいハ則そなへ初苦後功はくごうを致いたすを所ところかくかくのとくとくよあくよあく
れハ大功だいこうとある足あしを柳やなぎ照文てるふみハさせせせる勇ゆう士しきよあくよあく
るハ向むかへ却きり一里いちり見みの家いえ戻もどして皆みな大勇士だいゆうしきある
也やあくあくモ照文てるふみは是これ照文てるふみうけうける所ところをりく忠ちゆう功こう
あくあくモ又また入いよよくくいいるるハ仰あおううんんと來くわるるよよみみ
又また又また紀きニ六ろく安房あはへかかて來くわのる段だんよ照文てるふみの宿しゆく所ところ
此像かぞうは蠶蓑せきまつあるを咎とがめて時節じせきのとく令めいせせあるへけれとも
このあくあくかかるるおおを弄なふふて小兒こどもかかといいれれ猪いのの又猪またいの

ゆくよくよくもんもんれれるるうかかうれれともとも小こ回まわああれれいいここららののあ
くくららへだだよよああくくモ蠶せきねねむむ一一終おひハ大人おとな君子きじ及およ婦ふ小こ
愛あいももああ間まここれれ又また照文てるふみう妻めの醜くじもも外ほかめめくくか
かかくくといいれれ一一理りあれれとも下しも女めのままてもても英ひで人ひとよ画ゑくくハ
畫ゑくく花はなをを飾かるる画ゑ工くわの筆ふでよ成なるる所ところあれれ化かちち無むよ
度た外ほかよ指さくくへへとと像ぞうふふかかるるヨタヨタうう詳う若わかもものの義ぎをを思おも
ヘヘ又また親おや侍しう京きょうへ使つかひひるるよ就つきくく大角だいかくう役わく不足ふそくを
云い云い云いといいれれ一一ハ誰だもも三さんう四ようへへだだりりあれれともともそそいい者もの官くわん魂たま
乎ふててみみつつう筆ふでををととりり繋つなりり不ふ可か故ゆゑ何なんととあれれ小こ說せ
稗史ばいしよ生うせせるる未ま生うの人ひととと必ひ天あま命めいあるる仰あくく不ふ可か

ハ或や初化の脚色を走る時この人ふゝ多く好役をつげんと思ひしも何をうりす至らぬあり又多
人ハらゝく好男好女
の死をまゝきも殺さむ、ある時宣は至らあく徳化の
自由はあらずむすりあり宣は是別世界ある紙上す
造化の小児あるやと思ひ每は怪しみ思ふ所くまれらの微妙に
他の化者とへとも知る者稀あるへー况者官の悟り猶へ
だるやうハ邊莫大角ハシムかすもあくそく又さる故ふあ
さるあもあくそ初山猫對治を降くの外猶立くる大好役
あきよ又その人の天命かく化者とへとも自由はまくし
けよと強て大江より代々京使を譲せむあらくよおそ

こうあれひいづる縁可うんや我知るべ^レ諒翁あくよ
主張あく^レ試^レ脚色のこゝも達てるゆへ大江より勝る術慈
向あく^レ愚^レ及^レあれハ必階級を降りて感戴をへ
えの脚色のまゝふく大江役を大村ゆめりうて八十役も
二十役も芬りてその人ゆく相応^レくね^レ吾ゆくせす
は所^レ所云大角ハ是また^レ精立の終役あれハ故あるゆ
かく是よりの後赤岩百中の辰^レ最後の水戦^レ至り
て獨立する大好役あるも是この人の命分^レ然るを結
局大圓圓まで元黒毛^レ役^レ過不及をう云と評せ
らる^レ亦五極^レの肉^レく^レ吊り取^レきる所^レ あ

他の理論難評ハ曲^{まげ}ひひくあも及ふ庵^{いん}を所云五禁
の一ニある他をりと真と取^とれんとと承め又云理
論^{りん}説りて教む所へは附^{つけ}屬するもの武禁^{ぶきん}をその理論
難評の如^ごく^く照^て見そあはせハ悟らる所とある
へけれハ傳^{つたへ}てハ漏^{もろ}して荅^{こたへ}せら人の思ひ惑^{まど}と爲^なすの
えも^も舉^あく^くる餘^よあそ^そへて知^しるへ[。] 只^{ただ}官^{くわん}は難
生るあいあいて評^ひる自己の好憎^{うじやう}をもて他者の非^ひを舉^あて又
ゆく^よ前評^{まへひ}を非^ひとして他者を資^{すけ}てテ云^いいづれ^一條^{じょう}
たり[。] 其^{その}之^の評^ひの非^ひあるを知^しらふも^もつけ^{つけ}てす[。] 前
コ首^{しゅ}巣^の兩端^{りようばん}にて並^{そなへ}てあるされ^はみづ^{みづ}非^ひと^てある前

七

評^ひを並^{そなへ}て舉^あけ或^も又他の首宦^{しゅかん}のあうとすもあらんあといる
ゑ^ゑ猶^よる^よて寔^{まこと}その好^うも所^所を遠^{とお}とや^{まく}欲^ぞむ^よ
似^そう^うこれう^{いと}く^きのとく^{とく}事^{こと}班^{はん}麻^まといふ^{いふ}とを以^もて
ひうてこれら^らの言^{こと}あく^{いよ}く佳^よ物^{もの}と^りつへ[。] 開口^の
篇^{はん}は評^ひ書^きの遲延^{ぢれん}を化^かす^いひとく條^{じょう}下^さの因^{いん}よ任^ましてハ
哉^哉言^{こと}もあらよ^うといひれ[。] 實^{まこと}と^と裨史^{ひし}小說^{しょう}ハ皆
載^の黑^{くろ}空^{うつ}ぬわあけい[。] 又哉^哉言^{こと}りて評^ひせら^うと誰^う不^敵^て
と^も思^ふる者^{ある}へき^あれ[。] すこの細^ほ評^ひ中^{なか}あハ哉^哉言^{こと}あら
て嘲^{あざ}諷^{わら}の言^{こと}見^ええ[。] 已^ま如^き愚^ぐ煉^{れん}の考^{かた}さ^う何^{なん}といひ
とも三十^{さん}年^{ねん}の文^{ぶん}道^{みち}を思^ひふ[。] 怒^おるといあけれ^よと評^ひ焉^が

ふきりーうみゆ涼薄の言ひ似てきの毒はよのうの嘲諷ハ德
害を損^スの基^ス詩は云戲謔不為虚^ス虚^ス嘲^ス之^スとけ^ス貲
者の必慎む^スあるへ^ス 諸の次仗宣あれ^スいと憚あら^ス
とある^ス訓諷せまくほ^スきとあり^ス評^ス翁^スハ好人物あら^ス
且方あり^ス學問あり^スことをもく文遊の間^ス於^ス實情あら^ス
さる^スとある^スとく^ス賀^ス者^スハ人の名^スを祐^スて人の惡^スを^ス除^ス
已^ス過^スを責^スて人の惡^スを責^スて^ス教^スある^スと思^スく人の
全^ス身^スを信^ス容^スれ^スも善^スとあつ^ス難^スをうど^スあ^ス
とく^スゆ^スい^スよ^スや自己^スの方^スを示^スん爲^スある^スナレ^スとく^スの如^ス記
ハ^スく^ス徳^スを^ス寧^スひの端^スある^スとみつう^ス舊^ス書^スと唱^スへ舊^ス

癖改め^スと^ス自^ス許^スて愆^スを飾^スね^スは^スふ^スそ^スや同好^ス
の友^スの戲^ス墨^スと^ス評^ス志^スある^スか^スてもある^ス一^ス偽^スの^ス意^スと^スして
萬^ス千^スの^ス傍^スら^ス大功^スも遂^スく^ス世俗^ス文遊^スの間^スも^ス累^スれて
大事^スをあやまちあふ^スとあつら^ス是^ス愚^ス々^ス毎^ス也^ス而^ス之^ス
二^ス千^ス俗^ス年^スの知^ス己^スひより^ス練^スも^スある^スこそ^ス解^ス懈^ス怠^ス
齋^スある^ス詳^ス考^スの^ス價^ス齡^スよ^スあれ^ス礼^ス所^ス十^ス年^ス過^ス肩^ス
の兄^ス况^ス三^ス四十^ス年^ス來^ス文遊^スの久^スも^スと思^スす^ス煩^スをも^ス
惟^ス正^スと^ス死^スハ^ス翁^ス必^ス吾^ス真^ス後^ス之^スあづん^ス後^スの^ス草^ス
ヨリ^スい^スあ^スも^スある^ス志^スれ^スと^ス面^ス從^ス後^ス像^スの
今^スの^ス世^スよ^ス吾^スあ^スも^ス誰^ス亦^スあ^スい^スひ^スを^ス愚^ス真^ス方^ス

正の信言を書さんと憚らる辟言喻あれも首大坂高城
のれ古田織部正の脚疑ひを蒙らむるよりありて自刃を
命ぜられて國除られ家絶すこの比安後帝力主ある
人の為よこの人を辞せずく吾毎は古田織部ハ後を
よくせーと思ひしよ果てへこうはあきこといふある人そ
の故を問ひよ帝力主答ふされいとよ古田ハ茶の名人
あくとして古昔よりの名物の茶器をひめゆる跡よ多歴ある
るをハ少うち碑記くす手接せあとて秘流あけり門
人等其意を問へ答て云別は故あるよあくまで古物の
多歴あるハあくよおうううううううううううううう
多歴あるハあくよおううううううううううううううう

増せてをみて吾はあくせうといへりかれい織部の全集
を缺ひそ反て是を憎めりあのじ術を推せとせば自滅
を取りしもあくせうといつれしとあくねよんえう今
こあくせうとて辞翁の舊譜は擬そるあくねよん
の全集を纏ひてよれとふうけれとも思ふよとといふれ
彼によ似てあくよは良善とて理論異説をして必死
アラキエス又考あくよは古畠名の全集を纏ひて
よれとふうけれとも死ふとへあくよは古畠名の精詳
百歩あくよさることをめざむへこれうの終りハあくひの精詳
のあくよを毎詳するよと諒め一ともあくよあくねと辞翁

ハ只、嘗ては舊ニ癖と自許してより、用ひぬされば已としむ
を憚り、ぞ見うへでかくいひを紀とども、もうち出で文遊
の信をつゝさまく、を信言ハ美あらず、美言ハ信あらず、
り、萬一ても容らるる、とある、自他のことひまつらうんある
うん

己このあ三年以來、老眼年々衰邁、志ぬれと尙勵
めぐる筆硯を勤拂付せ、さうりうへ今、茲の夏より、今まで
至りてハ大小とあく一字も、ほんえも、一行も書きくとも
あくまでこの故よ、この精神も字をあくぬあくと/or
残せまつまつ、又字をあくぬあくをうえ、書せて又

それをさすす、写せられ、二支三帝魚魯二写の矢、
うちも宣く精覺をあひて、よ、辞、翁の行、辭、筆、四分を
廢ひぬふうへむくひまつよとてかくあん

天保十一年秋八月四日

痴老七十、四解、社答



